



源氏物語

院



素をにひらひらと花をまじはるゝに
美はるゝのちの葉をひらひらと
あめふらふとてはよき事なり
とて人を知るにふたふたの心
わはるゝのちの葉をひらひらと
あめふらふとてはよき事なり
とて人を知るにふたふたの心

けいけいひらひらと花をまじはるゝに
美はるゝのちの葉をひらひらと
あめふらふとてはよき事なり
とて人を知るにふたふたの心
わはるゝのちの葉をひらひらと
あめふらふとてはよき事なり
とて人を知るにふたふたの心
わはるゝのちの葉をひらひらと
あめふらふとてはよき事なり
とて人を知るにふたふたの心

一、本館所藏之書，其種類之繁，
 其數量之夥，實非他館所能及也。
 二、本館所藏之書，其年代之古，
 其價值之高，亦非他館所能及也。
 三、本館所藏之書，其內容之精，
 其編排之善，亦非他館所能及也。
 四、本館所藏之書，其保存之固，
 其閱覽之便，亦非他館所能及也。
 五、本館所藏之書，其流通之廣，
 其影響之大，亦非他館所能及也。

一、本館所藏之書，其種類之繁，
 其數量之夥，實非他館所能及也。
 二、本館所藏之書，其年代之古，
 其價值之高，亦非他館所能及也。
 三、本館所藏之書，其內容之精，
 其編排之善，亦非他館所能及也。
 四、本館所藏之書，其保存之固，
 其閱覽之便，亦非他館所能及也。
 五、本館所藏之書，其流通之廣，
 其影響之大，亦非他館所能及也。

かゝるものゝ世にあらざらん

たゞしき世にあらざらん

三月十八日

源氏物語

源氏百人一首

○惣論

黒澤翁満述

○物語のいふ物の唐土は小説今世の学双原ありといはば本より
 法形も亦きなり又いふは放りぬるを接して世を弄り
 其のいふ入る人の目をみるるも亦いふは人なりぬるを遊文子
 思ひ役なりぬる物なりありといふは甘作りさ由も又種々
 或を長き事をつまやりの短く書るもけり又短き事
 を引延てあざむくのたはるものほせども大方に世に好くあ
 りを世に好くあざむくは女なりて男女はぬるもの義理合
 らぬ人情のぬるは入るなりは他なる物ある事全今や学
 双原も亦ぬるなりなり其文の雅あると俗あると趣向は

古風あると今風あるとの差別をわたりて進回しにたれども
 なるも彼と是とを合せて悟るべしとて今世の歌學
 若流は是を子とつりて云々して昔を我もといふ
 輩はも、しや終に中々物語の本意もたれども以て
 非唯法違ひはれども是れ子たる為の物なりと古
 代の學双葉も人なりとあるされば昔を我もといふ
 も他り也とて物あるの中み其名ははれども今世の
 傳へぬ其趣向も如何なるか人知難くはれども大方今世
 は沙上止るる行取つては世のまじせ被取智を
 教はれざるは皆其ももきその如く奉末志なりけり
 やりたる物も是なるを猶ほ源氏物語は人教をぬら出

て無縁水いし人は完米ぬるは二代の留法事を公私
 後うて細子作りぬせる筆力凡人の及所ははれ且人情
 かくかくがちや其文の妙なる事難るに物あり世に
 能小説の中み水滸傳をりて第一の上能とて其出余り
 妙文なるは子是を著者として作者の子孫之代が
 子生進しては浮説ありては其文は妙なるを
 ぼんたる物も進進とも今は源氏物語よりべん進進
 水滸傳あがの文ははれと拙く日を回して論じ
 物もはれ中々も傳中人物はたれども始終一貫せ
 る物もはれ始終は人の後よりわたり始末一人
 後子不才也なるは源氏もて教へ難く増え人の書傳の

細なる所ありて平至て六妹に本末通しけり別人の如く
 見ゆると多きをば源氏におきては物語中数百人乃
 奉質を一人にまはと細やのみ書分て始て終を古
 写し聊も私を誰に譲の奉質被に被れ本性も老一
 質ある事一實も新しきを妙なる物に世よりてを平
 る水濟傳に於ては如く如きは増て其余は満ちるも
 只もされば和洋の小説物語類の中は源氏をうけ
 進するの如く輝を耀く獨りそのみ言とてよく妙なる
 事物語なる事を知べし然るも昔より其注釋は
 益もき儒書と佛書とあつて其を引出を其
 も其事を知る人の一に如くつかる所も眼を注げし味

見る人如きはいのまぢや

○此物語の作者は式部、兼前守藤原為時、娘は右衛門佐
 宣孝の室とありて式部三位とありて中堂、関白道長公方
 北方倫子に仕て其後一条院の后上東門院、則道長公の
 娘あるをりて又上東門院の女るとありて此物語は其程
 代する物とありて藤原氏に娘ありて藤原式部といふべき
 式部といふ名義は清輔の代名所にして式部といふ
 名に説けり一は此物語の中にも其巻を伝る其流き乃故に
 名をゆゑ一は一条院清乳母の子に上東門院に奉りし
 て我ゆゑは若し何れに代はせし中より其の友あり此
 名なり武藏守の義之とありて付て若し説けられども

則紫式部の出る日記の中より如何と此後より其の事やふ
らんと伺ひの源氏に似るべき人にも見えたり魚子上の
物より人々を思召する云々とあるは左衛門督公任卿我年紫
式部をよしと云々紫と云々云々は云々人源氏一部乃中
子紫上の女の最上御進ばおれぬ者びへて裁けらぬは
紫式部男子女子ぬらば光源氏やまがぬらひべきは語勢之悲し
其は紫式物語とハい生びよも一なるも云々云々の如し
を知べし其作者あま進ば藤原本より紫式部と云々
よせらるるものなり紫式部の作者より人々藤式部を紫式部
と云ひつゝ進める物と云々人々方々云々云々云々の如し
すはよび名も紫の文字を付ぬらむは藤原の物語中にも
ある

進める女を紫と云々古名付人事おのつゝの如きこと
考へ後々悟らるべし

○此物語の注釋ハ考よりハれり云々北村季吟乃
附月抄子其安をとりみり云々云々
ちハ附月より大方思り且其後より源注拾遺源氏新撰玉
小抄おのれ被是子を入る物も云々云々
るを附月抄に本文より見ん金備し云々云々
て水より是より色なる人等一且明くのみ成ぬる云々
いふおのれ申す云々云々
解るるに云々云々云々
首余り其のへん色お進むも其解方古屋子云々

物多し人合さく味あべ

○母子學武部に余りも好文を出生する罪ありて地獄に為
 たりぬり厚税の法師の輩法にぞんれりて論を
 罪とせべき事喜みけり古抄にもみぬが物語乃本意を
 せしめ強て儒子引付佛子引付ぬ地是法辯を執りて
 多しかる一大事をても通にる物無いありけり事
 之いまのころ不辯を見るべしおゆ朱雀院冷泉院と
 歴代の天皇の号を其も子出生する事いかりみまじき
 大罪ぬりもや本より唯其号を借るる色はりあり
 殊に冷泉院は母后源氏と密通は亂ぬるも子あるは

五つもあつてもさきりぬるを思ふべし發端の語ゆ何せり
 帝時よのる久ん云々出出の始終はもてかへべき事か
 りてや号もさうて思ふよ上云々陸奥の浮説は古くかやの
 批判ぬりもさうて其序端をす信て法師の輩法に
 りるも子引つてさる筋にいし出せるものなりけり其子付
 りぬり悪く罪ありても云ふいみじくは所何りて
 笑ゆお世ど我皇國ハ神代なり今世人皇もまをたかたけ
 りるも白皇統もせのる天の地もも子天の日嗣也
 たゆ太古の天皇ゆいりも今上皇帝とはとて敬む
 事いびりてハ叶はざる理ぬるも中頃より此心を忘れ
 一書いりぬりも罪を犯する物少かり増す今の世

物形は、おのれが、ついでに、昔は、天皇は、大御上、をよめる、悪くも、
 書に、さび、御も、悟る、り、まき、い、唐土の、極の、極、を、ゆ、め、は、い、
 し、も、非の、限、を、思、へ、被、國、ハ、國、王、を、驚、く、は、
 た、と、ハ、皇國の、武將、も、ど、の、如、く、移、り、替、り、唐、は、世、と、成、り、ハ、洋、
 世、ハ、他、人、も、ハ、悟、る、み、及、び、又、明、の、世、と、成、り、ハ、唐、の、世、ハ、他、人、も、
 世、ハ、悟、る、及、び、代、り、皆、か、ら、は、ぬ、ハ、被、所、の、書、も、ハ、
 熱、く、も、あ、り、よ、ろ、と、出、る、を、な、り、も、見、習、ひ、其、風、を、移、り、本、
 を、忘、せ、し、る、よ、う、ハ、非、也、則、源、氏、物、語、も、此、群、を、ま、物、の、り、事、
 け、い、は、る、を、お、る、べ、し、然、る、を、近、江、或、説、り、是、を、助、り、朱雀、院、
 冷、泉、院、の、お、い、わ、り、お、せ、せ、る、院、の、名、も、天、子、を、さ、し、り、中、に、
 とも、何、れ、お、も、い、つ、ハ、お、の、り、お、あ、り、か、ぬ、非、あり、甘、泉、院、の、名、

則、源、氏、物、語、を、作、り、

○今、此、書、を、作、り、故、ハ、世、ハ、小、倉、百、人、一、首、の、言、を、都、都、行、ハ、
 進、り、牛、引、畜、系、を、な、り、女、を、も、も、舌、の、回、り、お、程、より、志、じ、く、
 口、を、び、お、ひ、り、忘、り、り、お、さ、ハ、何、の、故、より、此、百、首、を、一、巻、と、
 ね、一、巻、を、一、加、り、世、ハ、弘、く、あ、り、る、の、自、自、訓、安、く、り、事、子、
 法、ハ、子、叶、る、故、ハ、然、り、る、而、己、ハ、何、れ、お、い、は、る、こと、ハ、物、を、一、調、に、
 出、り、其、の、日、を、一、り、り、何、れ、お、い、は、る、物、を、お、進、り、か、り、ハ、孫、益、行、り、れ、て、
 老、者、男、女、と、も、子、孫、の、ハ、百、人、一、首、と、誰、か、ぬ、老、者、も、お、く、山、り、
 奥、高、山、を、さ、し、り、行、渡、り、之、其、後、ハ、是、ハ、習、ひ、何、の、お、い、は、る、
 た、ら、ぬ、お、い、は、る、こと、ハ、何、れ、お、い、は、る、調、に、出、る、或、ハ、伊、勢、物、語、或、ハ、
 古今、集、お、い、は、る、を、始、り、則、源、氏、も、源、氏、を、さ、し、り、世、ハ、何、れ、お、い、は、る、

五十四帖の巻名の紙もをかきつておせしる物もされど是に唯
 僅は紙とある而已より物語中其人の知れし物も知れし物も
 増て其の如きもの所端をも何れも知れし物もいづくは且は
 此れもまた古の世に弘く上下おしあべしものごとくは物も
 びさる物もいづくも知れし物も行はれざる子法本を考るも
 是母姑子縁を加へて一巻は世に流行する物もあれはか
 益々目別されたるかきつて向しつて事いづくは
 いづくはたゞは儂々樂しうにせざる故に自行りて難きこと
 今に源氏物語中ある人々も此れも一人一首づつに於て傍
 女泳人の小傳をある一紙の注解をある一紙を縁を加へて
 けりか小倉百人一首もある物もかきつて板子ある世に弘く

て幸お行の進みお人の子のかたうとて物もたゞは
 本の前を行へ終りたおしあべしものごとくは物もたゞは
 自は物語の所端を世に童子の口におし目あれし物も
 一のきりつてその本も一紙に唯はれりおのりかきつて
 此度聊のいともおしあべしものごとくは物もたゞは
 ○此物語に出する人々其教れし三百廿一人あはるは
 向きおしつて其の如き人々たゞは六条は御息所は大臣は
 姫子も前坊は御息所とあるは大臣も前坊は御息所
 此れは上を知らせるおしあべしものごとくは物もたゞは
 一紙に唯はれりおのりかきつて物もたゞは
 能生るものごとくは物もたゞは

いとかりたる見玉もなほと出づる人々は被合せしむるも過
 へたるはつたはつたの勿論も其餘物後中日もどはつた人々
 とも自ら一首も詠さる人けりとも是等物後也このとき
 者ともよき人へてしつる一首作を撰び出する共敷百
 廿二人の歌もあはるる

○上りもよきゆき共なるも歌集人もは選べ又歌もよき名あり
 人けりたると秋好中宮女房よりは歌集もよき三四首を
 選べ出一或ハ殿上人ともよきもよき誰ともよき歌は歌
 まして被合しつるも今其歌の詞を取てそよ人の名と一又ハ共
 任まのりもよき付はるも一假初の名をもよきけ出する共作
 者のあひりもよきばいひつるもよきむべなるかさるるるるる

はるより一れり且ハ拾吟の女蘇吟の女歌の歌も本より作者
 は知らぬも歌集にも是等ハ物語の始の方に出する人々被合を
 かりづるも目別は別する人の夢さ故に唯いつとけりしは選
 りもよきあるも思ふべし今後とも別は歌集もあはるる

○拙書は出玉も位に人ハ甘極官を出入り是大方は定也
 然れども今ハ此例よりかたはるはる六条院と出玉も光源氏
 君と一柏木権大納言と出玉も柏木右衛門督と出玉も歌集一
 是等ハ聊もよき度く世人の耳にもあはるる方を出し玉も童子
 子おぼえ安しつる見玉もよき且歌はつた子被合し拾ひはつたハ
 つた物の始つたり順子今ハ小侍も歌の解とも見合せる源氏

一部は太古の道も思ひこられぬ人なりともて結文は物
しつともそちなり

○給へ童子子目別安しつりし人とも結文は物なり
物なれば唯後子任をて大方は物せよとてれを見知人
人の名も甘き一断もつりおと且は名を源氏百人一首と
しもなる子に甘きハ百廿二人の孫はつらまきつるへり
やもぬれども是ハ唯おほきなり源氏の孫も小倉百人一首
のゆき物なりつりつるを晴し知安しつる名も人とも結文は
何やと思入人の名も是もつりつる物なり

源氏は夫乃源氏帝あり
葵の巻小朱雀院は法位を
ゆつりし林の巻小源氏
ゆふは歌ハ源氏の元彼の折
のらつる世の大臣ありてのへ
るも源氏をよ大臣の娘葵
の上は聲おほきしつりしき
あへる人おほき彼の時乃
数もはふは組つる系もゆふ
星をともりやゆひつる系も
をよそおほきおほきの子も
のちまきちつるを今乃元
ゆひふもおほきつる人な
りやと大臣の心をうつさせ
あへる人おほきつるけあ
きん回し権もつる

源氏一首

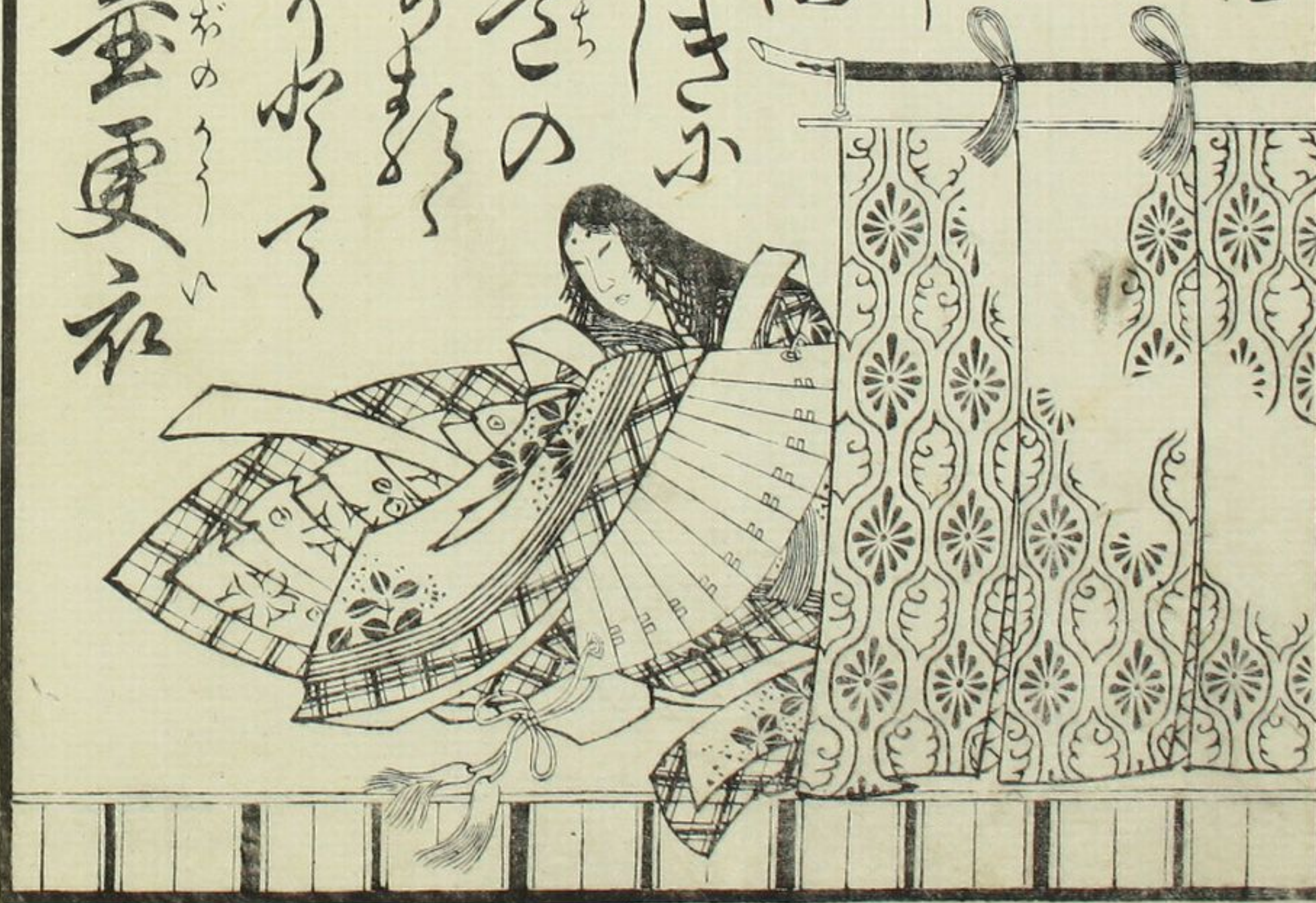
相壺帝



初めは
ゆひ
あまの
世を
契る
もは
つる

桐壺の帝は後深河氏の
法母あり相つむは巻ふくせぬ
は歌の宿ありて里入りの
ふんをひる時めあはるる
今ハ世乃限りそそ帝に
別道なり出てゆく道の
照しきついでにまへに
み行はれ命ぞとく生まる
しみ行はれとてうら

今里
命あり
きあ
あ
の宿
さの
かまろ
相壺更衣



桐壺の女房たつははるる
相壺乃るをかくせし後その
里へ帝は法母へ行て御ん
とひる時お庭の虫乃音を
つくすよめるる虫はあは
るは限りを時はうてそを
程もきおをたきたる
泪のこぼるるのりおと
虫をたるといふらんめあ
あみだるのよせなり

御負命婦
かまろ
こゑに
かまろ
長きお
あみだる



按察大納言の方の相
 春のよれの母たるは
 上の御所の命婦の
 御所たるは
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の

更衣母
 虫の音
 ああまき
 何さあま
 雲はるる
 雲はるる
 雲はるる



あまの御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の
 御所の命婦の

引入大政大臣
 むらじび
 何も
 ああまき
 何さあま
 雲はるる
 雲はるる
 雲はるる



桐葉素は... 源氏の姓を... 源氏一音... 源氏一音... 源氏一音...

光源氏君 (Genji Monshi) illustration with calligraphy. The figure is a woman in traditional court attire, seated and holding a fan. The calligraphy includes the name '光源氏君' and other characters.

源氏素衣は物語の... 源氏一音... 源氏一音... 源氏一音...

左馬頭 (Sama) illustration with calligraphy. The figure is a man in traditional court attire, seated and holding a drum. The calligraphy includes the name '左馬頭' and other characters.

左ののびのり拾をうひつきた
 る女まゝ別上の歌はほつと
 んをまゝと考のさめづの
 きやうと我をむらふ教へ
 つひにまゝと強はひや
 別るまゝ折あんとてや
 是やわう君つを別る
 君はほふ身は別るまゝ
 こけとて洋る物を
 以てまゝにほりの先を
 いひ倍ももされまう

ぬまき
 わの歌
 手を
 ちや君の
 まう
 かおん
 んひつふ
 ちあを
 拾喰女



左ののびのり回車く月夜
 女をわひふまゝはま
 女のまゝきたるにづ
 備とて冷せよとあそ
 舞も面ふく月もあ
 もにたかひくすま
 若もれもんのつれ
 りと免さふささる
 るに志はさ我を
 折さばまづれと
 を倍まのたひま
 似るゝ

ことのねのてん
 琴音殿上人
 月夜
 えあ
 ら無
 若あ
 侍
 ちあを
 と免たる



髪ひきたる女まゝ如し上り殿
 上人への返しよの終は女あふ
 枯人をまじりけふよみんけ
 るとは返し父其殿上人を侍
 せよあれりのに云ねせよちり
 へより吹風とて今も今も
 笛も我のつらむべきま
 ちなりと今十月まれば本
 枯しといひまをまをまを



本枯女
 こころ
 吹あみ
 先ま
 笛も我
 むま
 こころのまもあ

源氏物語の物ごとくは
 女まゝの如し上り殿
 上人への返しよの終は女あふ
 枯人をまじりけふよみんけ
 るとは返し父其殿上人を侍
 せよあれりのに云ねせよちり
 へより吹風とて今も今も
 笛も我のつらむべきま
 ちなりと今十月まれば本
 枯しといひまをまをまを



藤式部丞
 さかみ
 あま
 ま
 夕ま
 むるも
 まま
 以のあやあ

優者の娘もさうあつち上り
顔のほろこゝろいふおれは
不折はほろこゝろいふおれは
屋のりまをさるる中たし
の恥しきやうのりもた
あはれかやうにゆき
こまをゆいぬき

蒜喰女
あまこゝろ
おれも
へそめ
中あま
ひるま
何のほろこ
うすま



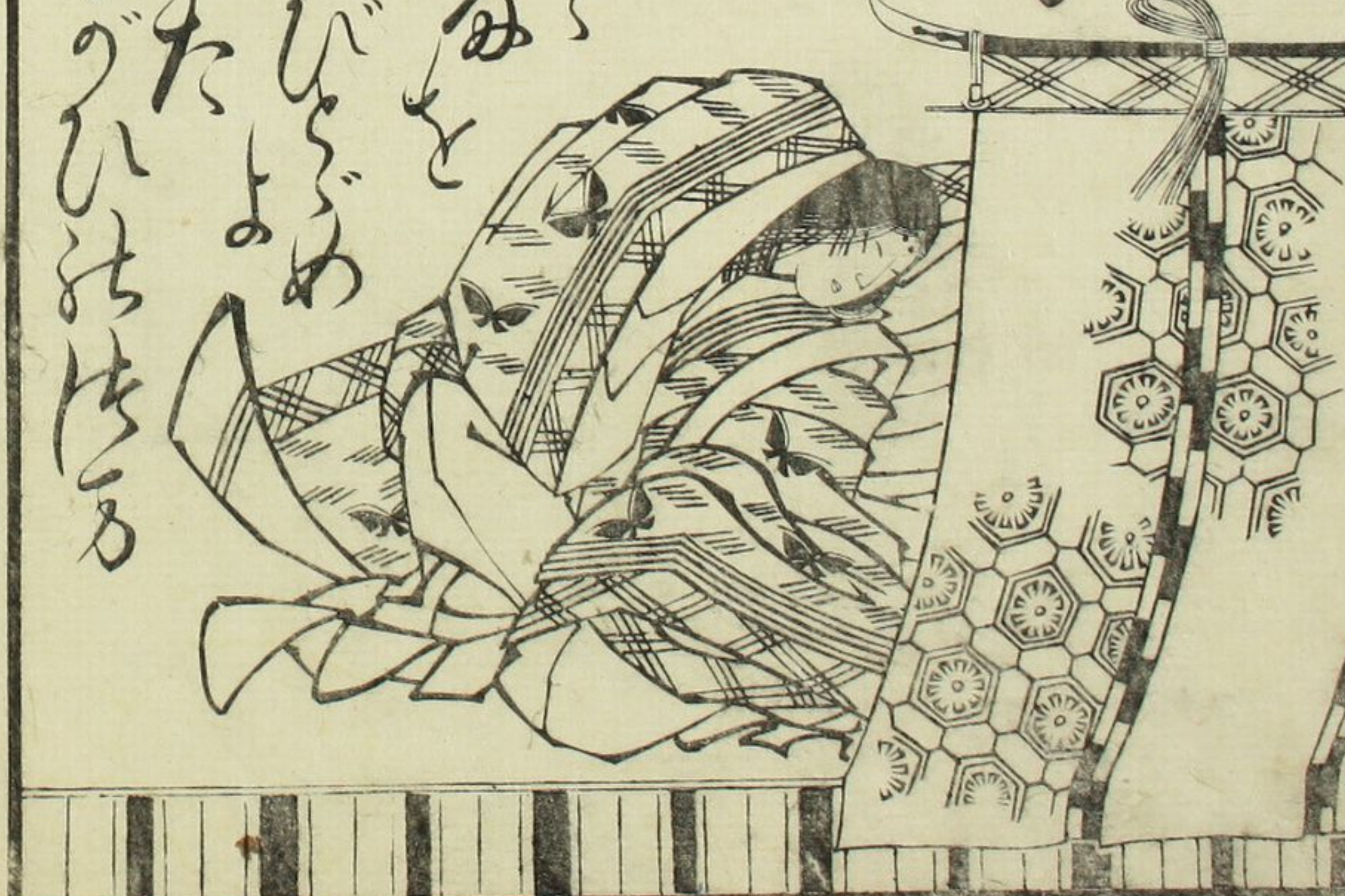
父のいふに母相重の弟は
始末におぼすは弟は
とをえらるるは友位を
重兼は老に大政大臣の
老は致仕の表を
まはるはは娘を井原と
この中をさし
さよわむは
夕まを招くは
法者の集るは
来は名跡を
事仕るは
之下は
本のゆり
たを
足

致仕大政大臣
我病あり
藤の
たそ
まづ
らぬ
か



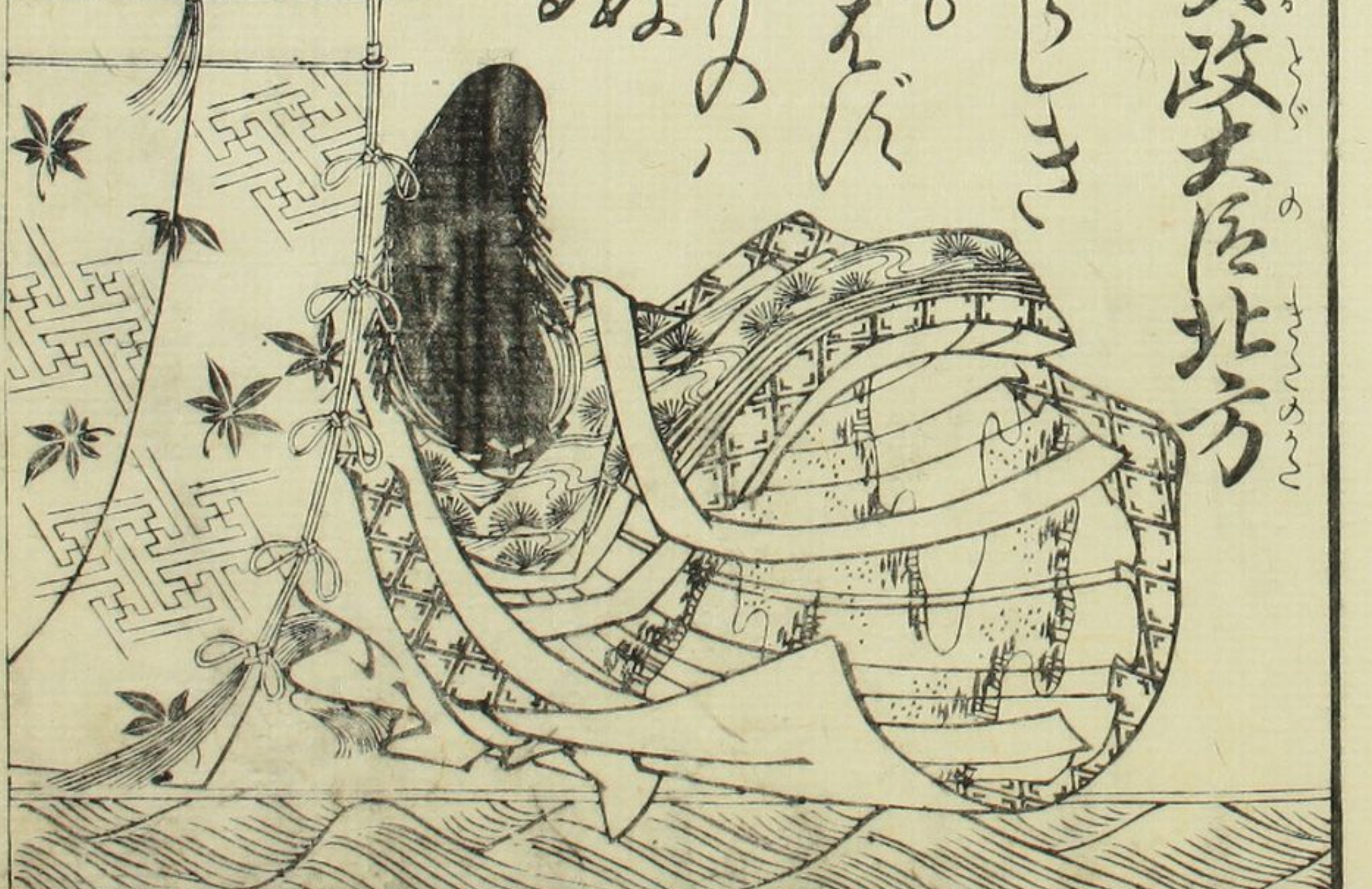
父のいふに大后母相堂の帝の御妹
五段仕のちの御母相堂の御妹乃
巻に源氏の中の方と成業の巻は
巻を生く後六条法皇の御堂
まのむらさきをばはる物のけふ
くろくみなるを源氏といふま
めあへる時ははるくみなるにてま
法皇の命をその魂のいかにいせ
る人の物思ひもみれはるにけし
く魂を思ふの御ついでに合はる
むらさきをばはるをなれと人の
魂はくかき出るをえくをばはる
をむらさきをばはるをむらさき
みよりくよなるをばはるにけし
むらさきを合はるをばはるにけし
ついでにけし

葵上
新し
とむ
そめ
うづ
我ら
むらさき
した
ついでにけし



相堂の三帝法皇の御妹の上の
法母より源氏の御妹大后
せめひく後にははるわ
むらさきの御妹かをばはる
大后とむらさきをばはるはる
の上をばはるはる初葉
源氏末あひく○
今を改めむらさきをばはる
むらさきをばはるはるはる
むらさきをばはるはるはる
むらさきをばはるはるはる
むらさきをばはるはるはる

ひきまの
引入大政大臣北方
何れも
あつ
あつ
あつ
あつ
あつ
あつ



伊豫子の娘もく出づるのまう子
之後子藏へ少づの坊方とある
○ほたてりも新瑞の秋を
むしむるは音たかきを何
まゝにすゝめはかゝらうのえ
るはくゝとゝんやうにやのん
うゝうゝはあま子付く一おれ
観たの思ひさむつる意も
まゝに心まゆゝゝんのもす
かゝれさるゝかゝらうの娘
秋の下折は風子とよたす
おれりありたるかゝらう



新瑞秋天
ほの気
風子
下萩乃
東雲
おれり

三位中納言の娘に致仕のかゝりに
存く玉苗とまゝの後は保氏お
おのれはくゝの巻をまゝも
は舟に保氏回車して何れか
候なりあひある秋のの方子
○古もかゝやりのまゝは人我
まゝにらぬ巻の巻の巻とまゝ
あゝるはくゝの心はまゝも
は山の巻こそ山はまゝも
あゝるはくゝの心はまゝも
秋のまゝもまゝもまゝも
と保氏を山の巻はたゝを
月子たゝてゝかゝらうの友
れ出する秋葉とまゝもまゝも



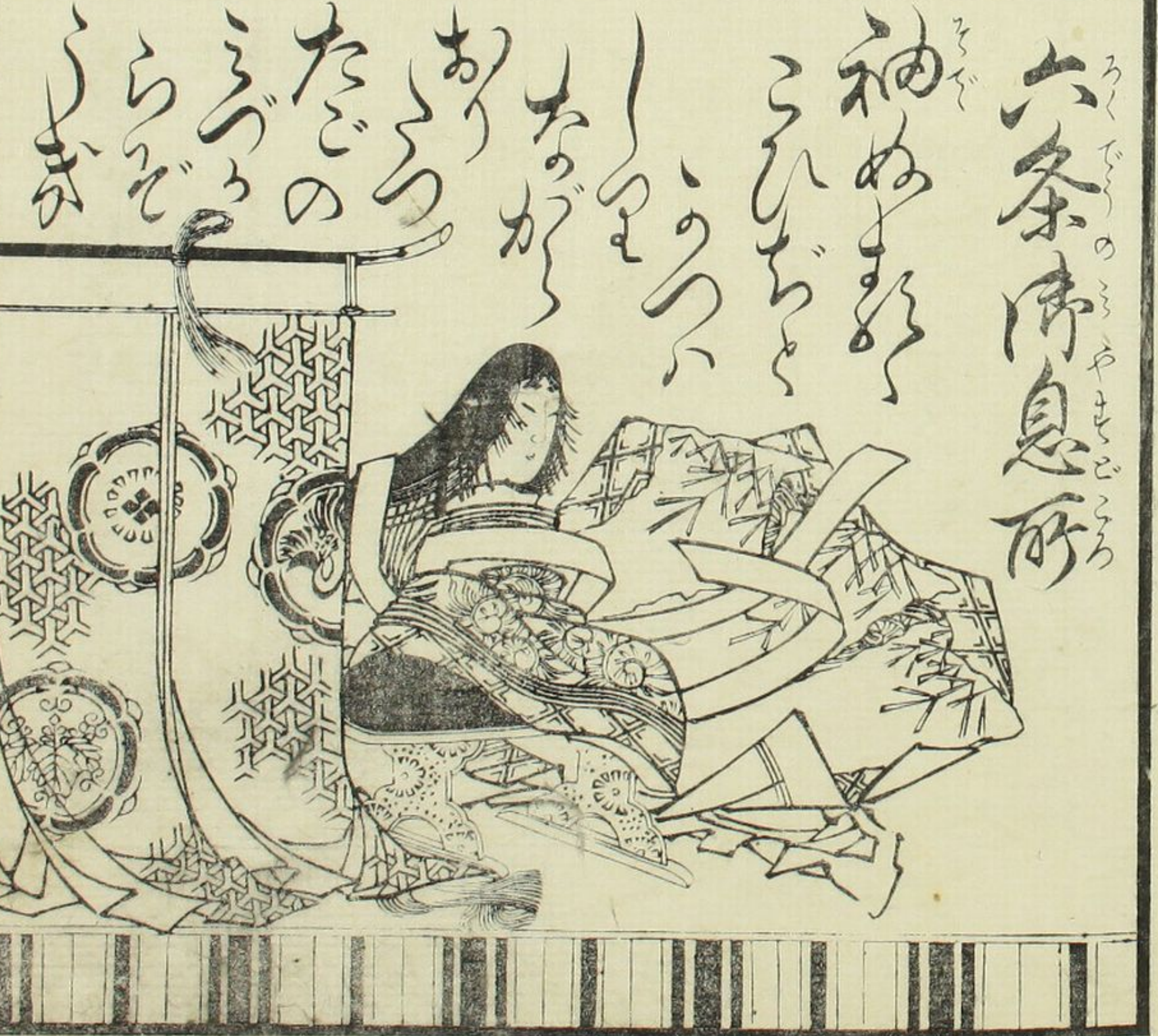
夕顔上
山の巻
ゆる月
おれり
秋の巻
たえ
おれり

夕顔のよは五條の若み侍
 女房の原氏侍に侍
 夕顔のよは折さるる時
 庭にありてはさるる
 夕顔のよは折さるる時
 庭にありてはさるる
 夕顔のよは折さるる時
 庭にありてはさるる



夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは

夕顔のよは五條の若み侍
 女房の原氏侍に侍
 夕顔のよは折さるる時
 庭にありてはさるる
 夕顔のよは折さるる時
 庭にありてはさるる
 夕顔のよは折さるる時
 庭にありてはさるる



夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは
 夕顔のよは

神代卷の乳母もては源氏流
磨くさけいへる時を
みよもやね直多し人あり
は源氏の尼君の乳を哀と
て則世にほつては
お上のおひきもつたれ
子にほつては
死にわたりぬれど
心を懐き撫治し
心を合はる初学
おね

はる
き
い
あ
さ
お
初
少
納
言
乳
母



北山の尼姑兄もては源氏の母
のねえは源氏流の
か持に北山にあり
時ふ山の花を
おゆきを
と
年
を
や
を
源
氏
を
は
源
氏
を
は
源
氏
を
は

北山僧都
おね
あ
さ
お
初
学
少
納
言
乳
母



源氏の癩病をおおしたる
聖人として向し時源氏の
法益をたすむるありとある
こと山法師の法益のありし
る事あき重なりたす
夫の法益のありしと見え
らぬ法益をたすむるあり
との事をもよほせしと見え
その教の権集りしと見え
なり

武部公の言はれし母を
大納言はむとあし稱せし母
かゝる祖母の居りしと見え
ておしにありしと見えし源
らぬ法益のありしと見えし
六条院の教をたすむる源
氏の思ひ人のありしと見え
は源氏の言えし併鏡をたす
源氏〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
みよ母子のありしと見えし
ることありしと見えし源
の地水法鏡のありしと見え
らぬ法益のありしと見えし
よそへて住まはれしと見え

何某寺聖人

奥山

水原

おれ

まきみ

あけ



紫上

くみり

地の鏡

万代

住

ある

ある

ある



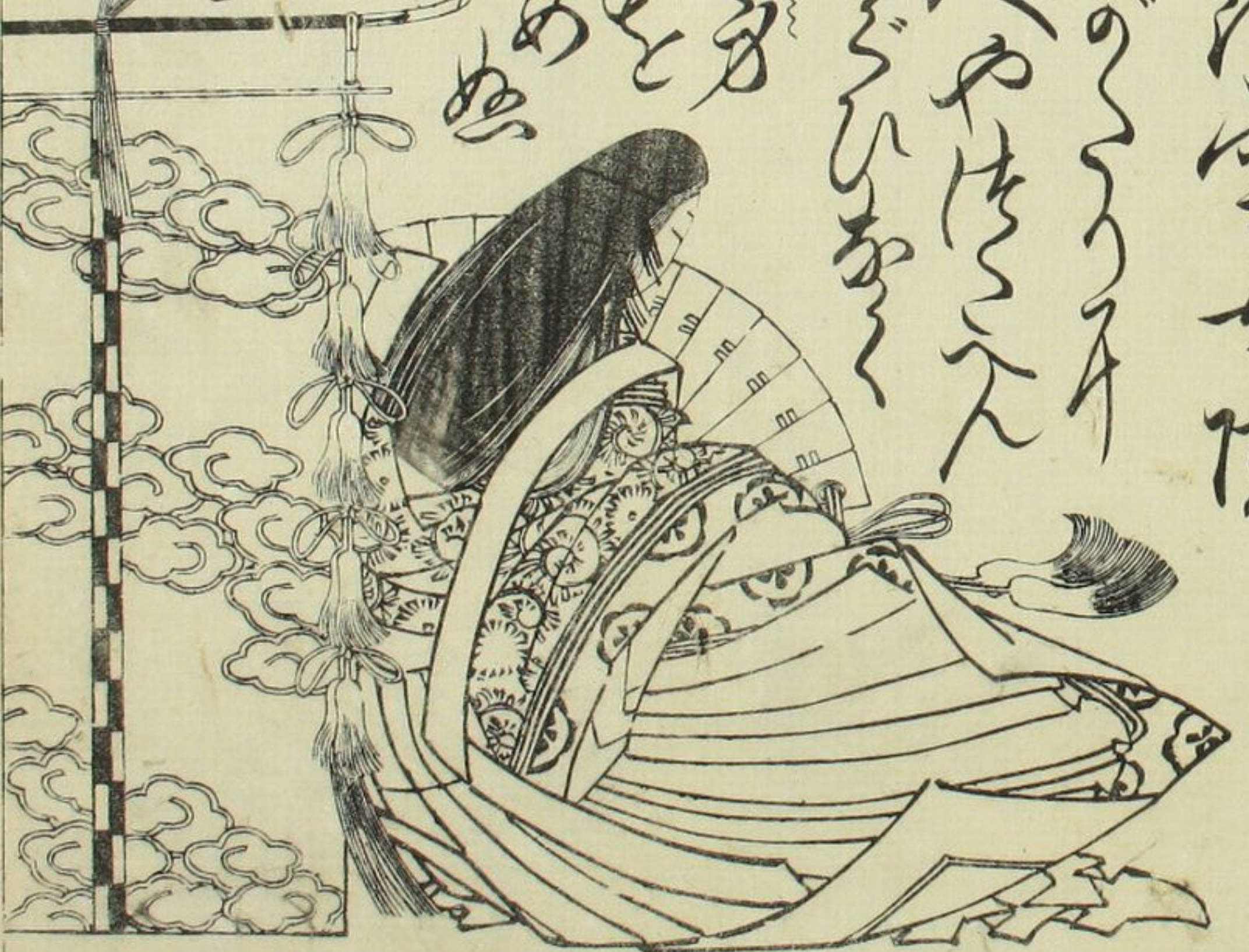
中川の御女は御女に
 後侍とて其家法を承り
 れぬをさむはほのほ
 君のかき招きとて
 世にさせたまはるは
 推しとてはたすそ
 えとてはたすそ
 世にさせたまはるは

中川女
 ほのほ
 世のつら
 あれは
 五月雨の
 おもひ



先帝の御女に
 のを相毒の帝の御女
 紅糸の御女に
 たまひの御女に
 源氏〇
 我身も
 後侍とて
 よしとて
 わざとて
 のおとち
 りに

源雲女院
 世のつら
 人わは
 たぢひ
 夢は
 夢は



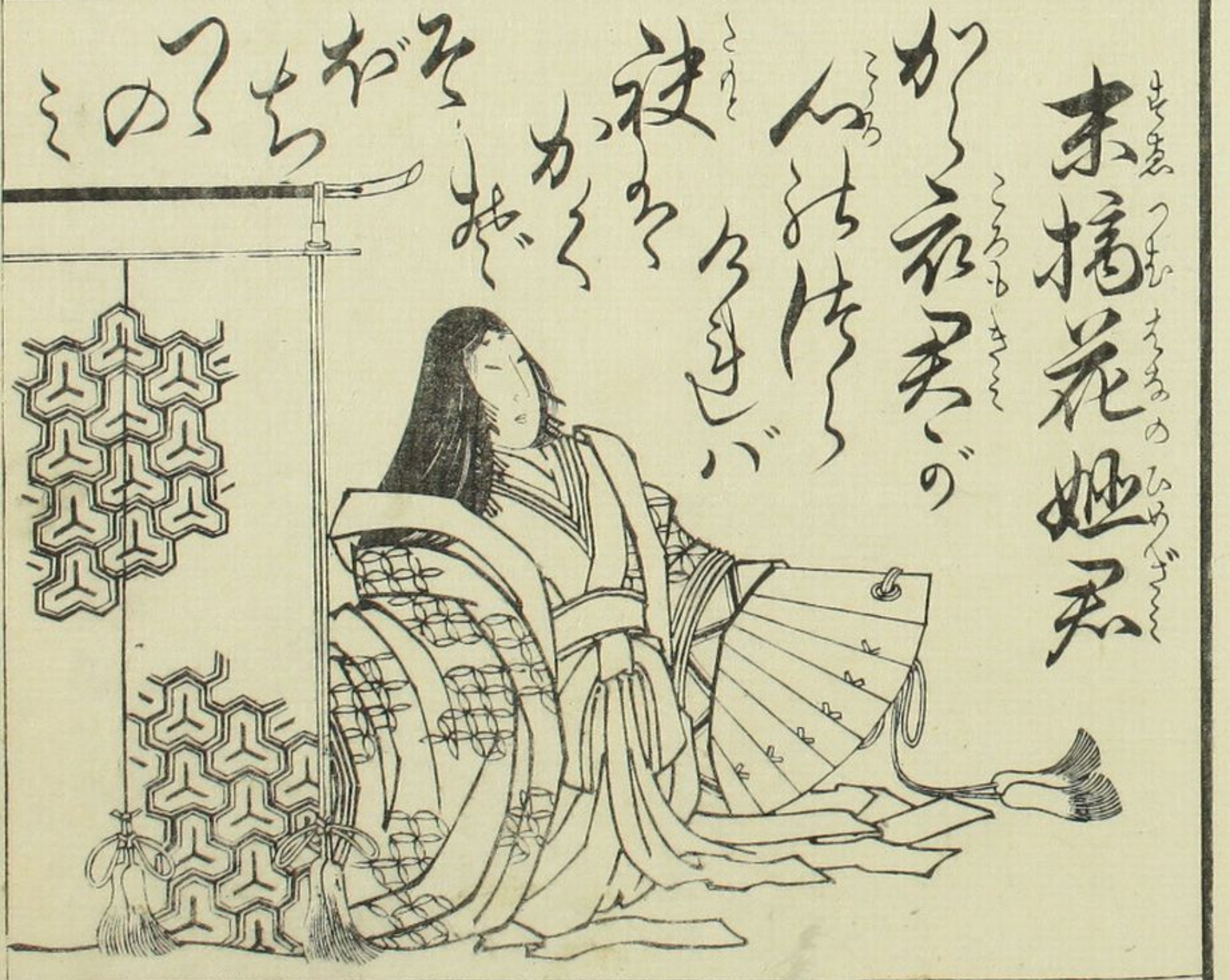
末摘花の女房ははるかに源氏
 止まらずに通ひそめてあひて
 ○いそそびて君がまはるまは
 わん物をあひひきこいしあまの
 らふと縁のへる時末摘花は
 替りて君をうらうらとこころを
 以て人をせはれりやまはるまは
 さげふ思ひまはらば又誰か
 を申すふつまゝに我を
 ら月舟もあはれ思ひまはれ
 りとて君のまはるまはるまは
 へ轉りて君をまはるまはるまは
 かゝりて



侍従

の秋つき
 水もらん
 おもわ
 さげの
 らま
 うま
 うま
 のいあやねまの

末摘花の女房ははるかに源氏
 止まらずに通ひそめてあひて
 ○いそそびて君がまはるまは
 わん物をあひひきこいしあまの
 らふと縁のへる時末摘花は
 替りて君をうらうらとこころを
 以て人をせはれりやまはるまは
 さげふ思ひまはらば又誰か
 を申すふつまゝに我を
 ら月舟もあはれ思ひまはれ
 りとて君のまはるまはるまは
 へ轉りて君をまはるまはるまは
 かゝりて



末摘花姫君

かゝる君の
 心は侍
 杖も
 かく
 のち
 のち

二条のおとぎの侍姫... 御殿の太后の侍姫... 朱雀院... 御殿の中し... 御殿の中し... 御殿の中し...

おふ
 御殿
 水戸
 家の原
 たづみ
 やのくま
 浮き世
 月夜内侍督



朱雀院の母方... 月夜内侍... 御殿の中し... 御殿の中し... 御殿の中し...

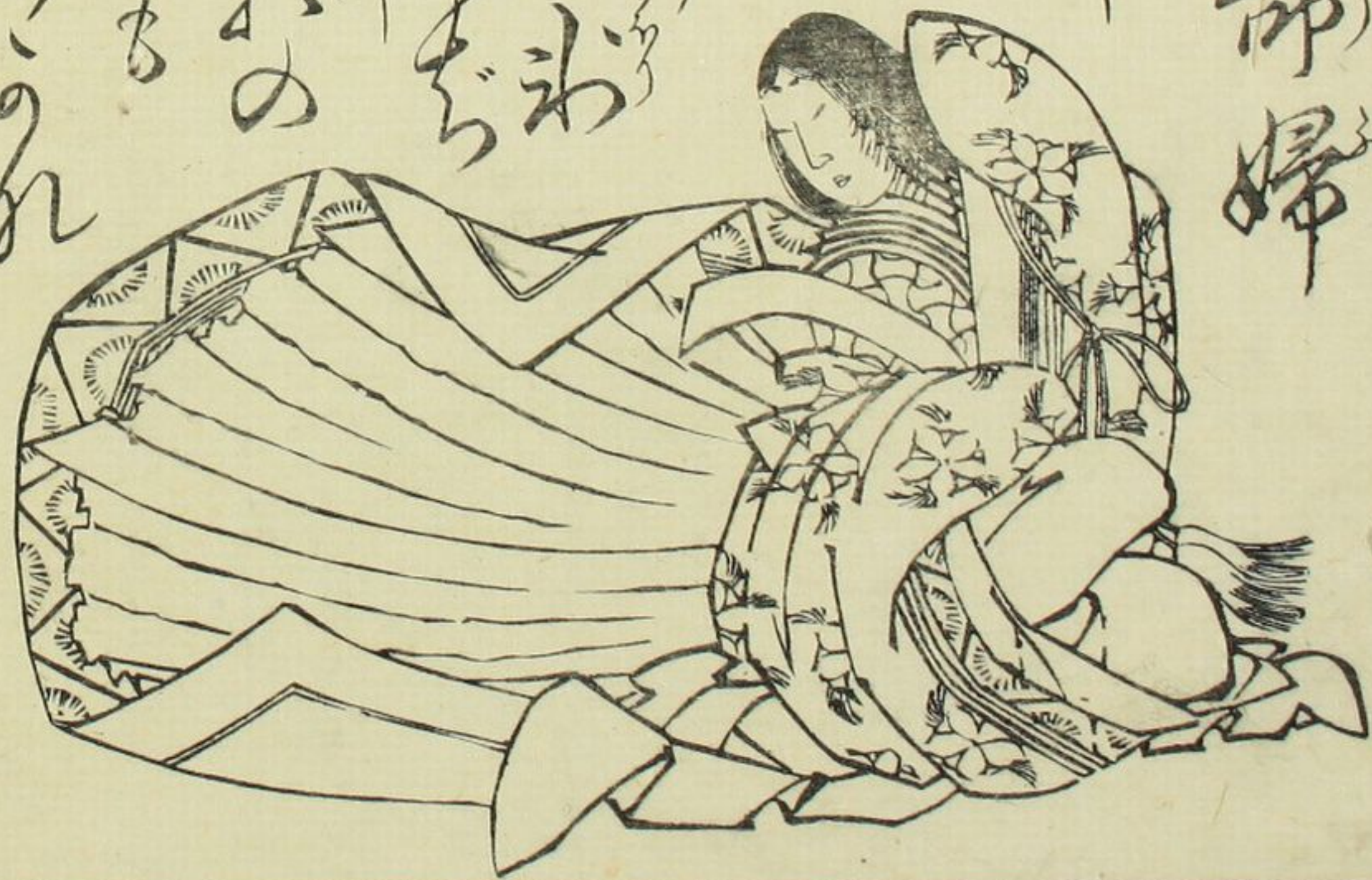
二条右政大臣
 我意の志
 大のべ
 鳥か
 何のそ
 天を
 待は



藤原の女は女院の女房より藤原
 氏の法心ありてこそ是れ則して
 目下女院に生れし女房の時
 藤原〇さへ藤原池の鏡乃
 さへもまた是れ別れをな
 ぞ怨しきと縁なるとは
 人の帝がらぬをせしむる女
 院の法心も縁を法心と
 こそ人も同じゆゑに岩井の法
 心人の法心ありてこそ是れ
 こそ是れ

王命婦

少
 岩井
 人親の
 女
 岩井
 女



藤原の女は女院の女房より藤原
 氏の法心ありてこそ是れ則して
 目下女院に生れし女房の時
 藤原〇さへ藤原池の鏡乃
 さへもまた是れ別れをな
 ぞ怨しきと縁なるとは
 人の帝がらぬをせしむる女
 院の法心も縁を法心と
 こそ人も同じゆゑに岩井の法
 心人の法心ありてこそ是れ
 こそ是れ

霧の雛女

霧の雛女
 女
 雛女
 女



大原家の源氏相妻の希世
 女師より花散里の清姫也
 此等相妻の希世を
 賜ひて後法をうか物下
 世に任給るるを源氏中
 ひと多ひて○橋の香と
 つりみ時をうか物下
 花散里とて稱せし
 一と人の目もあは荒
 てる我前新の橋と
 君とつりて稱せし
 之新の橋と新はつり
 いとをうか物下
 せし



人目かくる
 たる
 橋の
 新は
 つり
 あり
 礼

源氏殿の女師の清姫
 源氏の思ひ人後六条院に
 多き意賜る中法一人の
 法方よりあはる源氏
 一と人の目もあは荒
 てる我前新の橋と
 君とつりて稱せし
 之新の橋と新はつり
 いとをうか物下
 せし




花散里上
 月影の
 君
 あり
 礼

伊豫女の子は姑右近將監の
御子と源氏傳之付其
除籍せられ流塵は法も
て後をうつりしは巻中
人勅負尉子朱は家と源氏
は千人移り後平重成を父
帝の御前へ侍るは
母より其後の社を見し其
時高院の法被は源氏乃
流るせしめと思ひ出で流る
之の源氏流馬と引連て
養をがごとく世に甘時乃
を思へるが世を承事
神ありて恨しむそのかみ
子神を無き瑞垣は
り

源氏の氣母太敷の尼の
姑氏親大史處女巻子撰
律書梅枝卷の宰相と朱
源氏の流馬親と古位ひる
か人は源氏の流馬親の
流馬親の存をみるは
く人の存の存の故に乃常
世の國を捨て来たはり
旅のそよはるるをきけ
悲しき物も若はるは
のそよはるる事
とく今此存の事
と旅をるる文の上
の思ひれど
り

藏人勅負尉
引連て
乃
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと



加茂乃三つ垣

藤原惟光
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと
おののみと



前播磨守の子を源氏乃
 親く百つひひりく之姑藏
 今よりかきり賜り明石
 巻に納むるをその巻
 小頼貞佐度女をその巻
 と申すは別去るをその巻
 時よなる人の存毎時方
 此友よりけりぬもおれぬ
 男いぬるをその巻に
 女物を連る人より集え
 と云ふがや



近衛中納言を去り播磨守
 とあり源氏入るるを明石
 浦に停り老く山海に
 入ぬは源氏源氏源氏の
 ら一ひを入るるを二人存
 此尉はせんとの巻に
 に納むるをその巻に
 と物思ひの巻に
 との巻に
 るる巻の一人住るる
 思ひをその巻に
 るる巻の一人住るる
 と云ふがや



前播磨の姫君は源氏に
 仕りし中宮を産み六条
 院に散りし人なると中
 の一人は冬の方より北に
 源氏婚しておひらるるおのち
 こころを合ふ人ならん
 世の夢も叶ふまじきと
 り返して人の世の成りさあや
 らぬ人はいづれを申はんいづれと
 秋もかき添へんやと

源氏一首

らん
 夢を
 いづれを
 あらみ
 やのうま
 河津也
 明石上



大宰大貳の姫君は源氏に
 下りては産まざりし
 此方源氏に嫁しては
 歸りしは源氏に
 又使はしは源氏に
 人の源氏に産まざりし
 よもくは源氏に
 袖をたををさす

五節君
 浦子
 袖を
 たる



源氏一首

三四

櫻葉の女房の時を秋好
 中宮と弘徽殿の女房の左
 右の方をおく程合せりり
 時は女房の左の秋好方に侍
 う左伊勢物語右三三信を合
 せし時を承る人ハ伊勢
 物語の体き執事を探せし
 う唯言えりうふひは侍
 姑もべきうとて右方より古
 免きたうと満せしと云ふ
 せし伊勢は名もつかひ
 ぬえい又波もなり



是も櫻葉の女房の時
 右はくきでん方に侍りうよ
 源の源一も承る人ハ雲の
 上に高き思ひはうとて
 う及し伊勢は名もつかひ
 ぬえい又波もなり
 伊勢物語を見下せる
 之は三三信の世に侍り
 物語の中は雲の上は



掛中教宮の孫石上入彦の
 北方之姫石上子孫して都
 小笠原時子入彦一人の石上
 とは此の石上を指して詠
 るべしなり入彦播磨守
 子孫一時に支那遊もは都
 を牛一子孫の事を経て此
 度一人家ゆく旅水舟のち
 旅を無き



石上

諸水舟

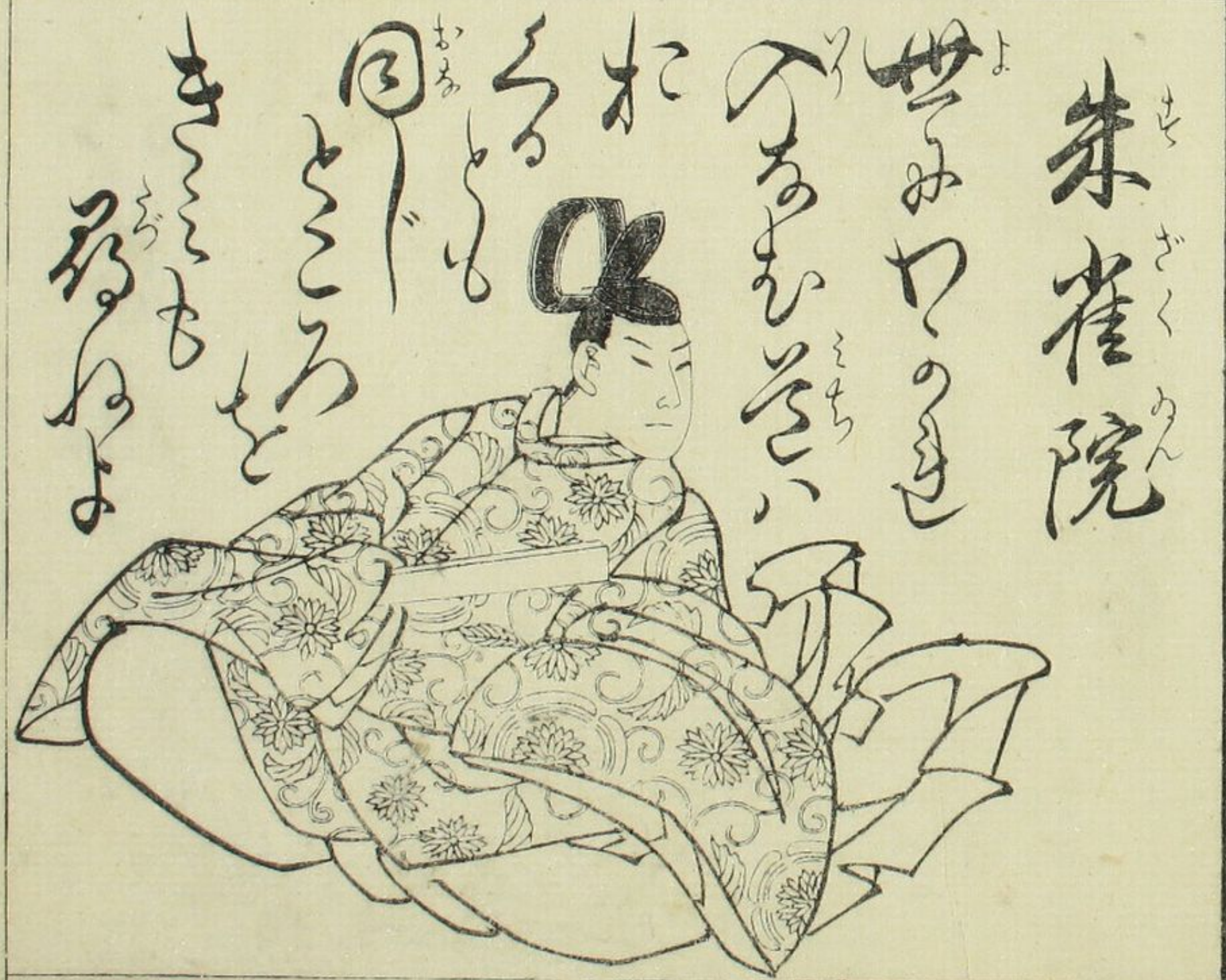
都を

は

聖中の

よ

相畫の帝法皇子は保氏
 の法兄と法母弘徽殿の太后
 とりて二条のいとこの法姫と
 相畫巻に東宮小三葉巻
 小法位不法をせりしと法
 くの巻不法位を治承院
 小ゆづりておまわさせり
 紫巻に法がわたりて西
 の法寺小移し住せりしと
 を法帝法法もまわさせり
 おまわさせりしとまわは世
 別世て死出の山法子入彦
 子入彦小あまねるも終
 更極樂の二重をまわる終
 来りしと



朱雀院

世みりの

入るむさ

に

る

目

き

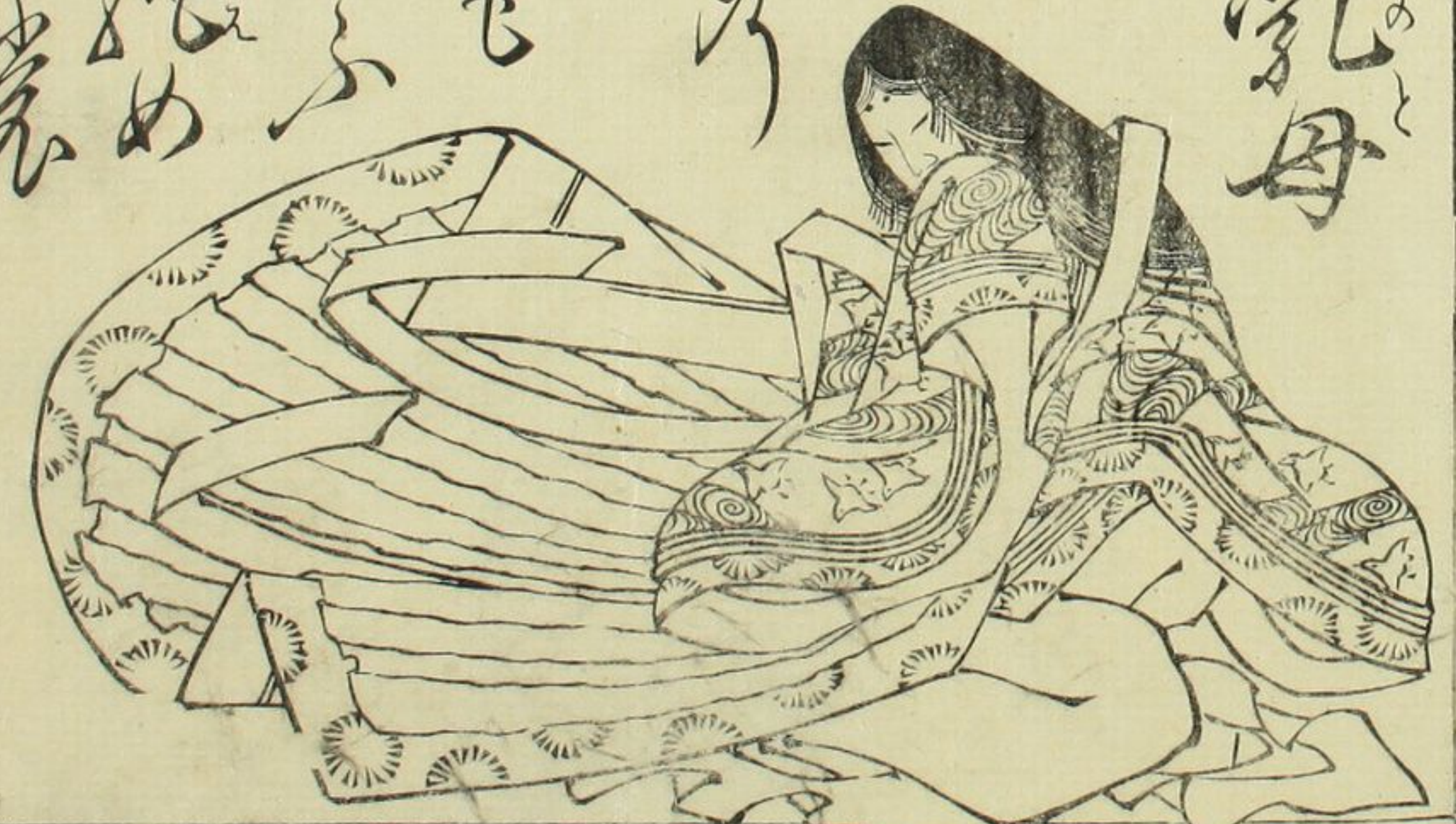
是も何れの時月は言ふは
くも御るはくは老くも
相毒の帯に親くは存り
一人由是其首を急ぐ
心天子の言き所位を括
ていつぬるは御方を隠
獨ひくも人々相毒の帯
を月よりせりあるは住ら
任事之所をうらむるは
よむよひは同くは
通つて任事おはすは字の
心も六非

右大辨
意のうら
きみこの
捨てる
よえ
の月
法蓮の
影のうら
あむ



父の参議言内母言青也
明石の上は産の時は氏
かの浦より賜ふ松屋を
娘をよふてて京に
あは娘をよふてて京に
後一賜ふをゆる時は石の上
別を惜まて○言はき
みは言はきも程をみ通
治院をよむと海を
心たてを言はきも程をみ通
き言はきも程をみ通
必む言はきも程をみ通
心の角を言はきも程をみ通
心の角を言はきも程をみ通
里ねは増へて云ふ也

明石乳母
山を
の道
河の
や



父の源氏母の養の上の養生堂
子生れて養女を養ひて元孫文
章生れし神代傳はあはれ家
を始まるといふ位位を養へ
白き巻子左大臣とあるは家
を養井屋とあるは中を養われ
るは養生堂を養へるは養
まごまた養へるは養もあ
るは養へるは養はれ
るは養へるは養はれし
るは養へるは養はれし
るは養へるは養はれし
るは養へるは養はれし



父の源氏母の養の上の養生堂
子生れて養女を養ひて元孫文
章生れし神代傳はあはれ家
を始まるといふ位位を養へ
白き巻子左大臣とあるは家
を養井屋とあるは中を養われ
るは養生堂を養へるは養
まごまた養へるは養もあ
るは養へるは養はれ
るは養へるは養はれし
るは養へるは養はれし
るは養へるは養はれし
るは養へるは養はれし



父母ハ婦おのふ回ト幼
名にたてまつりていりて皇王
かぐつ子傳ててくろり降来
の時も從ひ世を世する人とは
くもよ上り回ト時子福した
く人の来し方を行先も都
に四方御しける仲中も傳
出るハ我身は上も言まら
おんづるに後付く君我
意うたふとあつらんゆぞと
阿まねあつと云歎詞され
くつふ歎詞を一つ子志する
物もく倍もゆ息を長く
けりけり子回トたげき
あつとを



兵部君

来かき

ゆきも

ららぬ

仲子

出る

阿まねいづ

きみとらむ

紀後の國人古事本を監
はくして田舎ら玉のく
を意く思きうらむと
あはれそよあつらん人の夫
子對そ一万一初りけり
物もくけり紀伊松浦
那統の神ををす
うしをまんと統の神ハ
神切皇后の位を神と
まつる



大夫監

きみは

こうそ

たのま

松浦

ある

統の神を

うけ

ちのまむ

左衛門少貳の山方を兵部
 部の人等が母を以てハ
 上の大夫の監が考はる
 せぬもまきのいふを唯
 即ち修す云々云々の語り
 子たる人にも云うがは
 の上を業にたまは
 祈る神の極子通ひてか
 る田かたおほいませるては
 自ら先まじりやある事
 もりく神の利益を
 一と云ふべし



父の御仕のむかひ母の御
 たまがぐはるる御氏乃
 忠女と云ふは藤原の御
 内侍督と成極の御
 藤原の御方と成て子
 中へ生たまはるる御
 兵部卿の御○の御も
 え兵部卿の御ひんたの御
 子ハ御物と云ふ御
 云々云々の御方と成て
 御考はるる御方と成
 御考はるる御方と成
 御考はるる御方と成



花の上のゆくは蓬菜ゆを
ひし深き子花の脊に負
とへる子よんてん蓬菜
花も存体求る不及をば
はみはくらの面をさる物
おのひもさるれやもさる
ららまはね老不死乃
なまの所はけしめん
く蓬菜を存る程に幸子
舟の内も老るといふ
子によろこば母のさるは
老るるよに云こ

花の上のゆくは蓬菜ゆを
ひし深き子花の脊に負
とへる子よんてん蓬菜
花も存体求る不及をば
はみはくらの面をさる物
おのひもさるれやもさる
ららまはね老不死乃
なまの所はけしめん
く蓬菜を存る程に幸子
舟の内も老るといふ
子によろこば母のさるは
老るるよに云こ

花の上のゆくは蓬菜ゆを
ひし深き子花の脊に負
とへる子よんてん蓬菜
花も存体求る不及をば
はみはくらの面をさる物
おのひもさるれやもさる
ららまはね老不死乃
なまの所はけしめん
く蓬菜を存る程に幸子
舟の内も老るといふ
子によろこば母のさるは
老るるよに云こ

今日のそはけもさるる
くまのりはくらくく
糸さるのどけき地乃
る子梅さるめをば掉
の一本もむは敷や
るるる西ふとと日新
と梅とさるるとして
あ

今日のそはけもさるる
くまのりはくらくく
糸さるのどけき地乃
る子梅さるめをば掉
の一本もむは敷や
るるる西ふとと日新
と梅とさるるとして
あ

春日女房
花の上のゆくは蓬菜ゆを
ひし深き子花の脊に負
とへる子よんてん蓬菜
花も存体求る不及をば
はみはくらの面をさる物
おのひもさるれやもさる
ららまはね老不死乃
なまの所はけしめん
く蓬菜を存る程に幸子
舟の内も老るといふ
子によろこば母のさるは
老るるよに云こ

父は致仕のちかき母は二条乃
おのの娘のまはる女乃若子
左近少将とてけるを婚す
追々昇進し柏木のまはる
権大納言とてあつてまはる
はまはるの御世に女とてまはる
かまはるのちかき葬の烟は
行ふもまはるのまはるの
まはるの成るも魂はあつてま
まはるのまはるをまはるのま
まはる

かまはるのまはるのまはるの
柏木右衛門督
申すはまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの



父は致仕のちかき母は二条乃
おのの娘のまはる女乃若子
左近少将とてけるを婚す
追々昇進し柏木のまはる
権大納言とてあつてまはる
はまはるの御世に女とてまはる
かまはるのちかき葬の烟は
行ふもまはるのまはるの
まはるの成るも魂はあつてま
まはるのまはるをまはるのま
まはる

かまはるのまはるのまはるの
紅梅右大臣
恨免るは
かまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの
まはるのまはるのまはるの



三河宮の乳母の娘
 子之則この言子仕上栂本
 仲立枝よりくは花の栂本
 ちよと女を言はせし初
 山○ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ういそ海をわかれ海
 八原氏子之を言はせし初
 文及びあま女を言はせし初
 たりとわかれと人の初を言
 ちよと女を言はせし初
 揚子と女を言はせし初

小侍従
 山ざら
 色子あ
 出た
 およそ
 枝や
 およそ

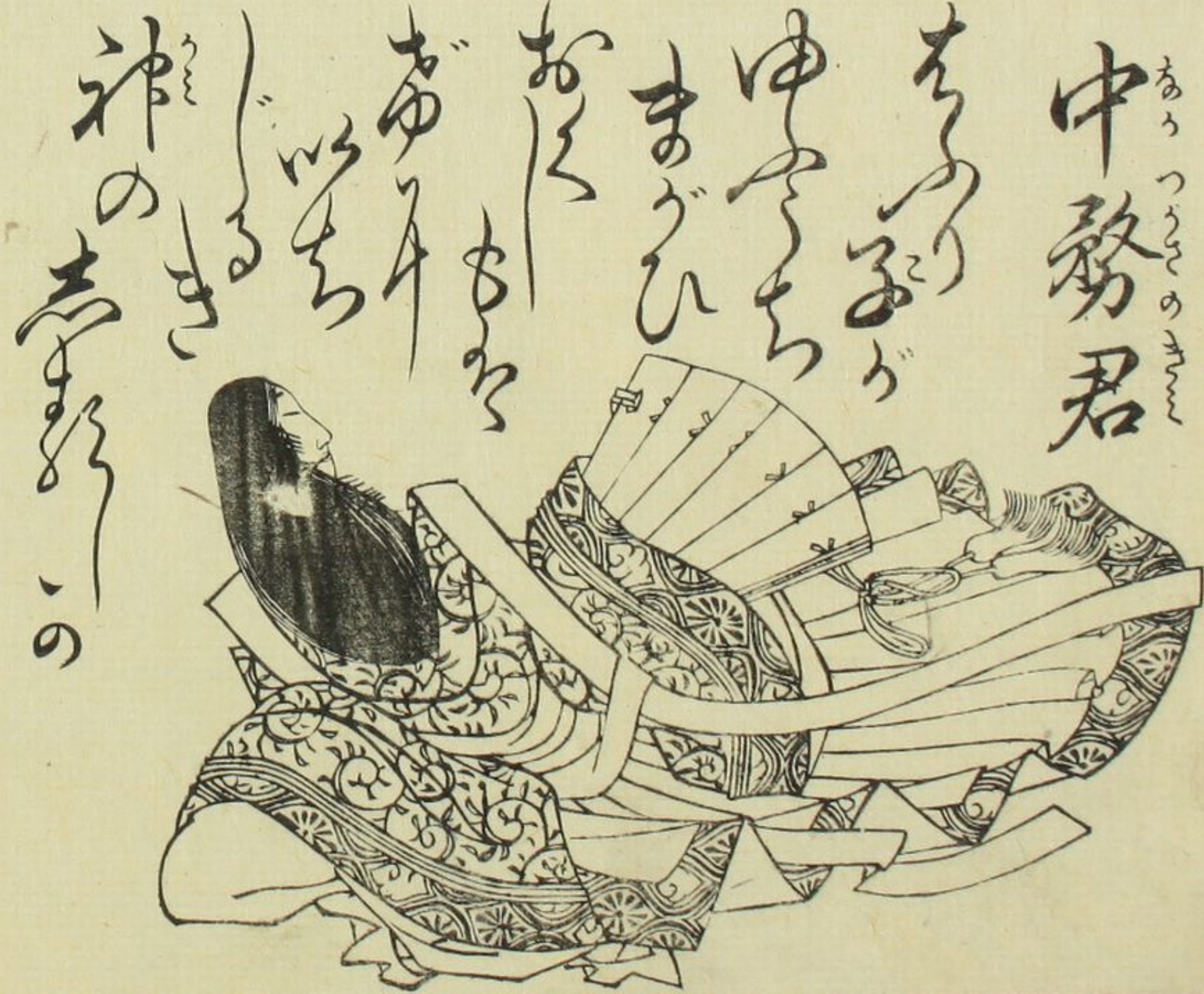


大田の乳母の娘
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初
 ちよと女を言はせし初

宰相乳母
 山ざら
 色子あ
 出た
 およそ
 枝や
 およそ

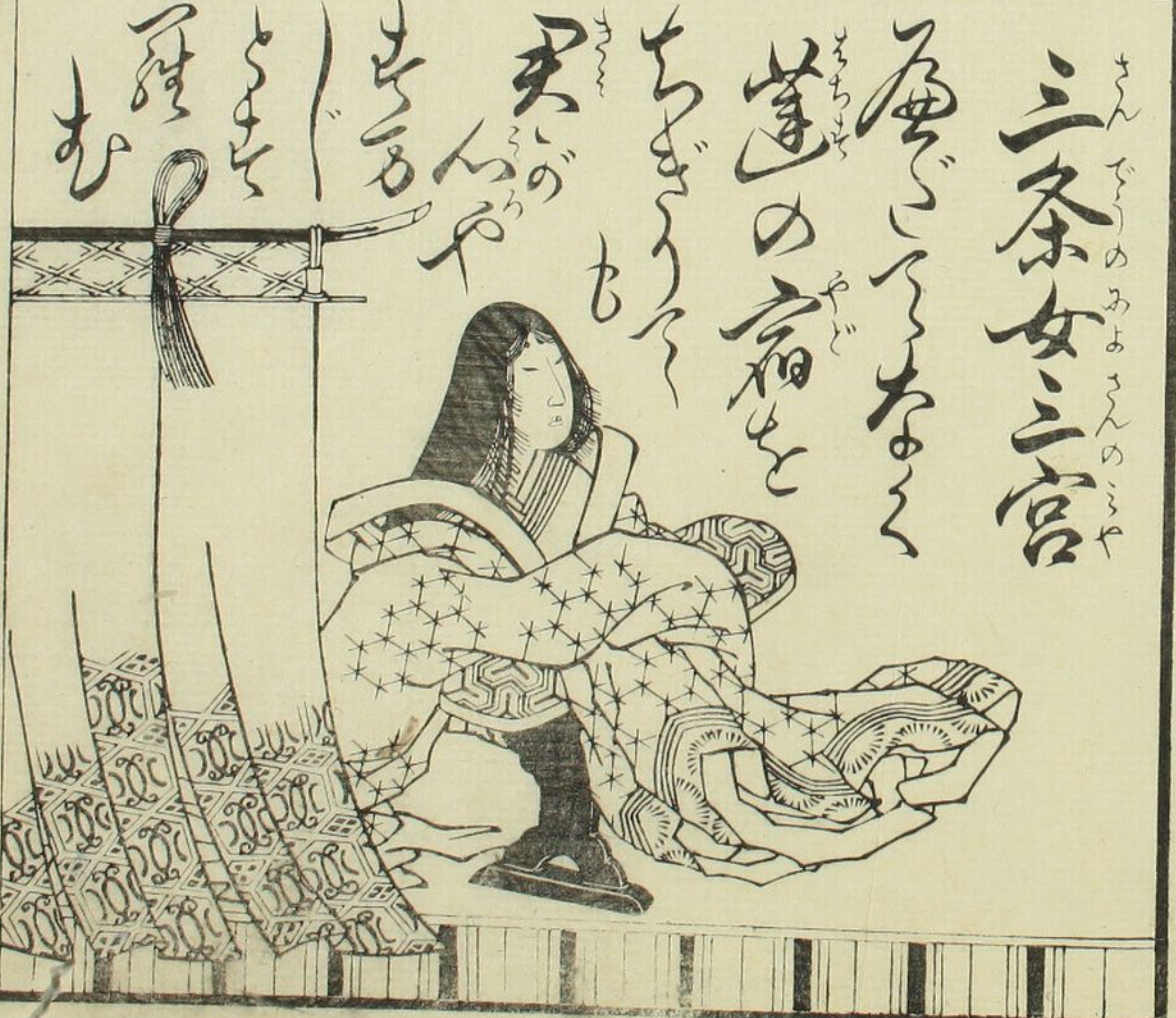


上の上の女房は源氏御の
 人をも侍し居吉子侍あり時
 子は上○まの江の松本君
 ちかき神は神は神は神は
 かつかも石中宮○神人乃
 みゆりしたる神系にゆゑ
 そろはほき神のまの神は
 なるをけけけ神のまの神
 子が手向る本御まの神
 おのづからまのまのまの
 原の神の御まの神は
 一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 なるまの神はまの神は



中勢君
 申やまら
 まぐひ
 おく
 あや
 神のまの

朱雀院の白女よて三宮也
 母の女房は源氏の御女
 院の御女は源氏の御女
 北方へ来て三宮の御女
 小葉大御を生く後尼も
 三葉宮に住るふは源氏
 なる時子源氏○源氏も
 一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 乃のまの神は神は神は
 る法は源氏の御女
 なる時子源氏○源氏も
 世の世の世の世の世の
 後の世の世の世の世の
 神の神の神の神の神の



三葉女三宮
 源氏の御女
 源氏の御女
 源氏の御女
 源氏の御女

朱雀院の更なる花葉宮
 此の母に此の父の宮に
 の北の方とありて後か
 本をせざるを夕霧とあし
 一〇時一河がかりぬを
 白ひかりに枝枯れし宮
 様とともみりけりて
 今季の妻に栲本の行方
 あれを死せざるを夕霧とあし
 後の王目玉を花の散る
 小倉の玉を花の散る
 栲本の死を花の散る
 せしむ

栲本
 行方
 玉の
 散る
 玉の
 散る
 柳の
 散る
 此の
 散る
 一条御息所

朱雀院の更なる花葉宮
 母に下は福は更なる後
 花葉宮栲本の北の方とありて
 本をせざるを夕霧とあし
 一〇時一河がかりぬを
 白ひかりに枝枯れし宮
 様とともみりけりて
 今季の妻に栲本の行方
 あれを死せざるを夕霧とあし
 後の王目玉を花の散る
 小倉の玉を花の散る
 栲本の死を花の散る
 せしむ

花葉宮
 此の母に
 此の父の
 宮に
 の北の方
 とありて
 後か
 本をせざる
 を夕霧とあし
 一〇時一河
 がかりぬを
 白ひかりに
 枝枯れし宮
 様とともみり
 けりて
 今季の妻に
 栲本の行方
 あれを死せ
 ざるを夕霧
 とあし
 後の王目玉
 を花の散る
 小倉の玉を
 花の散る
 栲本の死を
 花の散る
 せしむ

源氏一書

源氏一書

四十三

物氣童の氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし

物氣童
我が身を
何れも
おぼし
かみ
きみ
おぼし
かみ

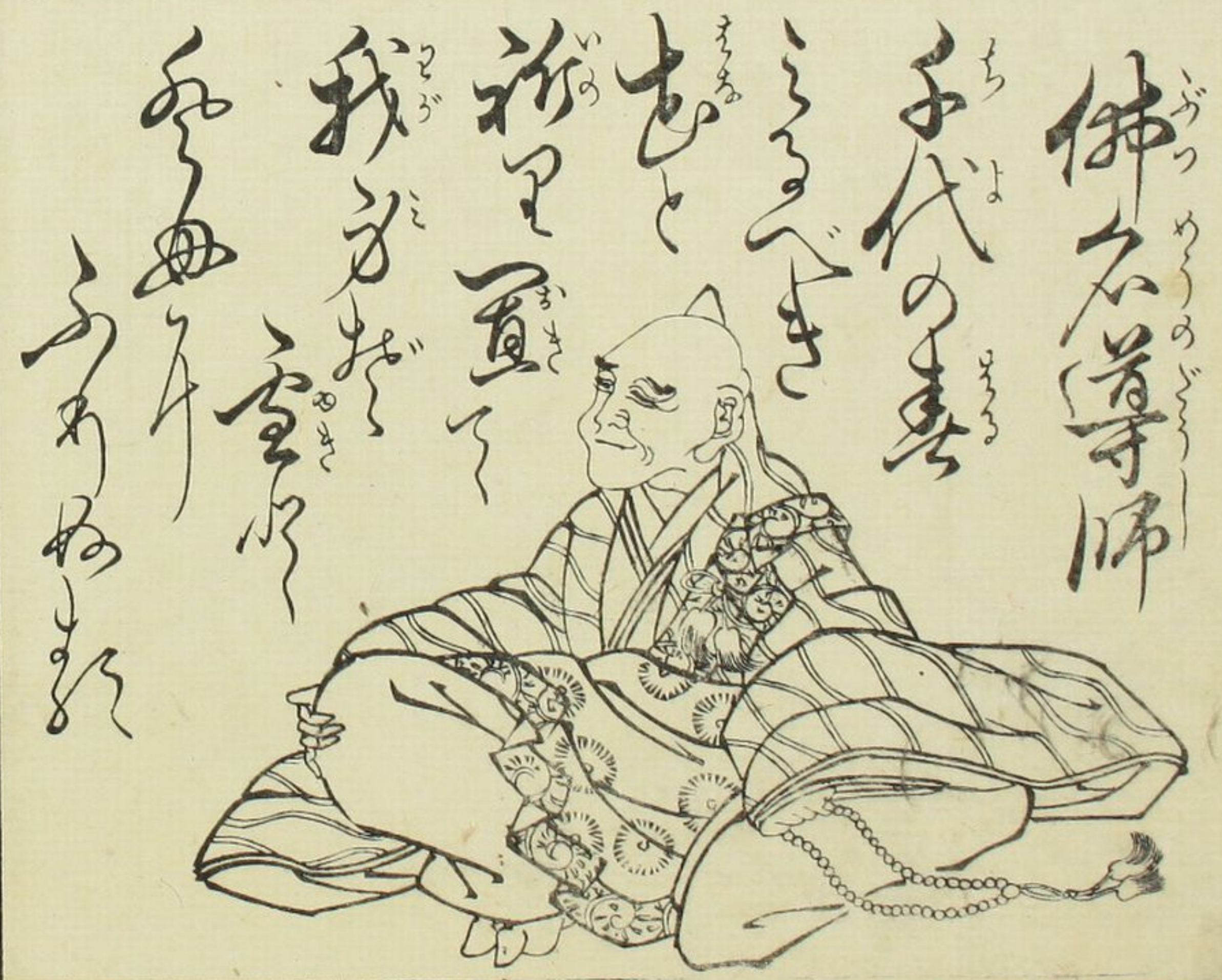


物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし
物に氣をいふ書にまをせし

六条院中将
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ



此の世もつる年の冬も六
 条院より行りける佛名は
 道行師とは既に源氏に教
 余りて法道世は用意り
 此をうりもか前より道行師を
 めて法道師とせしめし
 此の世もつる年の冬も六
 小倉に梅を今かか
 てんを誦するに
 名は八曲の國安民延命書
 を新しむるに梅を子代
 うけ見なすべく源氏の法
 をいりしめて我こそは
 ありては世にのりて
 吾れはつる年をいり



佛名道行師
 子代の妻
 志と
 新置
 我は
 ありては

玉昔は女房ありこの歌は玉
 昔は娘夫うちをかくて
 く少ねの通つるを薫も
 まはる海宮をほはさ
 りおれぬおはさささつと終
 ひやわね〇しははさささ
 つまらぬ人ぞさささ妻の表
 やささささささささささ
 ひもさささささささささ
 りおれはさささささささ
 べたれ唯一通つるを薫も
 ささささささささささ
 せいの心を梅はさささ
 らさささささささささ
 りかに梅はさささささ
 らささささ



梅花女房
 ありては
 梅は
 ありては

父の賢母玉當く竹川巻
子の中納言の女侍と集りて
兼の末代納言の侍りて
川にひておぼれを急ぎ
兼の涙りしりりりりり
兼の汗より竹川に流る
出節子侍りて底を
あきなりておぼれを急ぎ
くんに丹川にひておぼれ
文と下納言の侍りて
一掃子侍りておぼれ
思ふおぼれを急ぎ
子にわけてしるし竹川の侍
つんちやち園子我を急ぎ
おぼれを急ぎ
る子よりておぼれを急ぎ



藤侍従

竹川

おぼれ

ふの

は

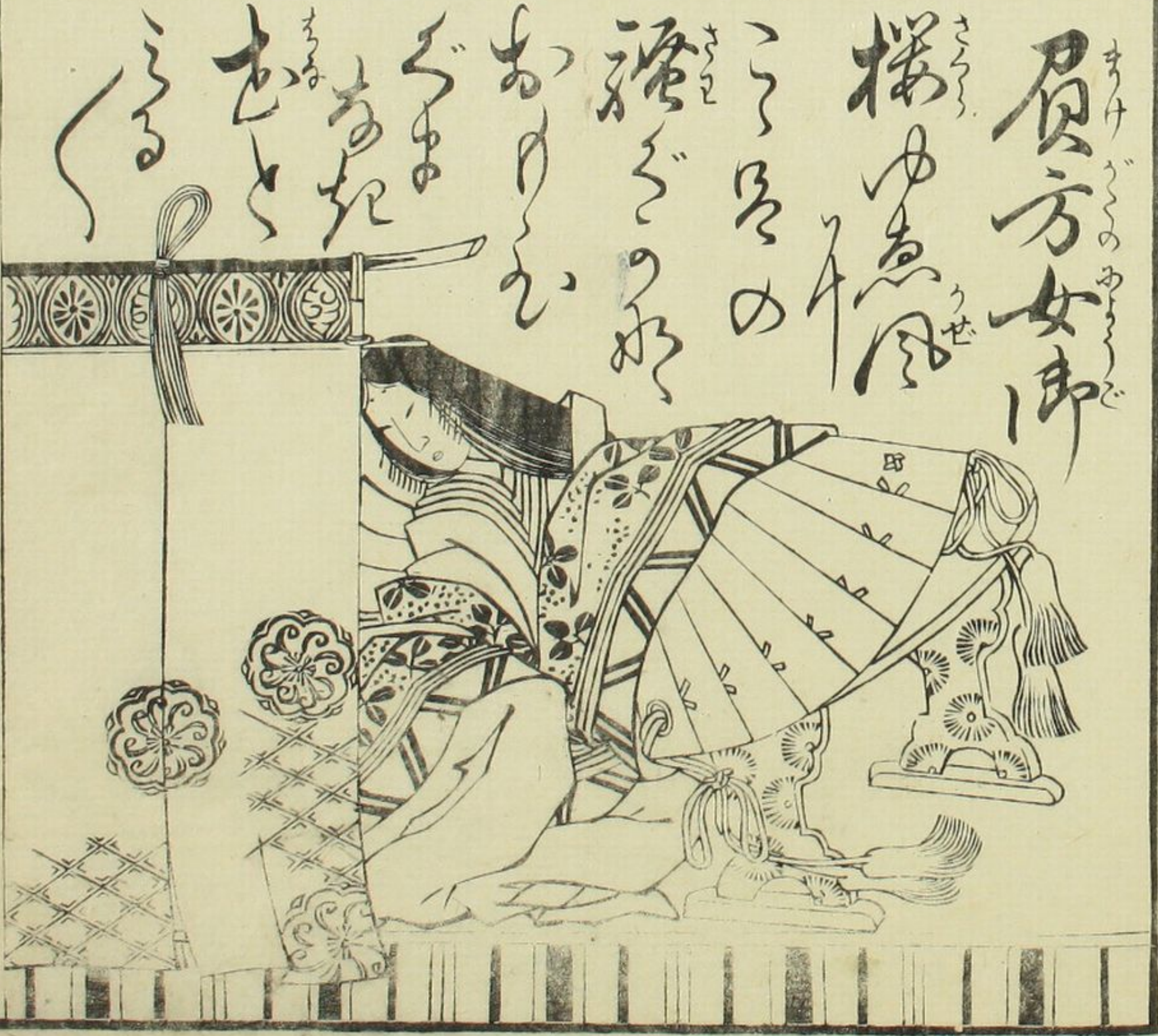
おぼれ

いのおぼれ

おぼれ

おぼれ

父の賢母玉當く竹川巻
子の中納言の女侍と集りて
兼の末代納言の侍りて
川にひておぼれを急ぎ
兼の涙りしりりりりり
兼の汗より竹川に流る
出節子侍りて底を
あきなりておぼれを急ぎ
くんに丹川にひておぼれ
文と下納言の侍りて
一掃子侍りておぼれ
思ふおぼれを急ぎ
子にわけてしるし竹川の侍
つんちやち園子我を急ぎ
おぼれを急ぎ
る子よりておぼれを急ぎ



員方女侍

兼の末代

川にひて

おぼれ

おぼれ

おぼれ

おぼれ

おぼれ

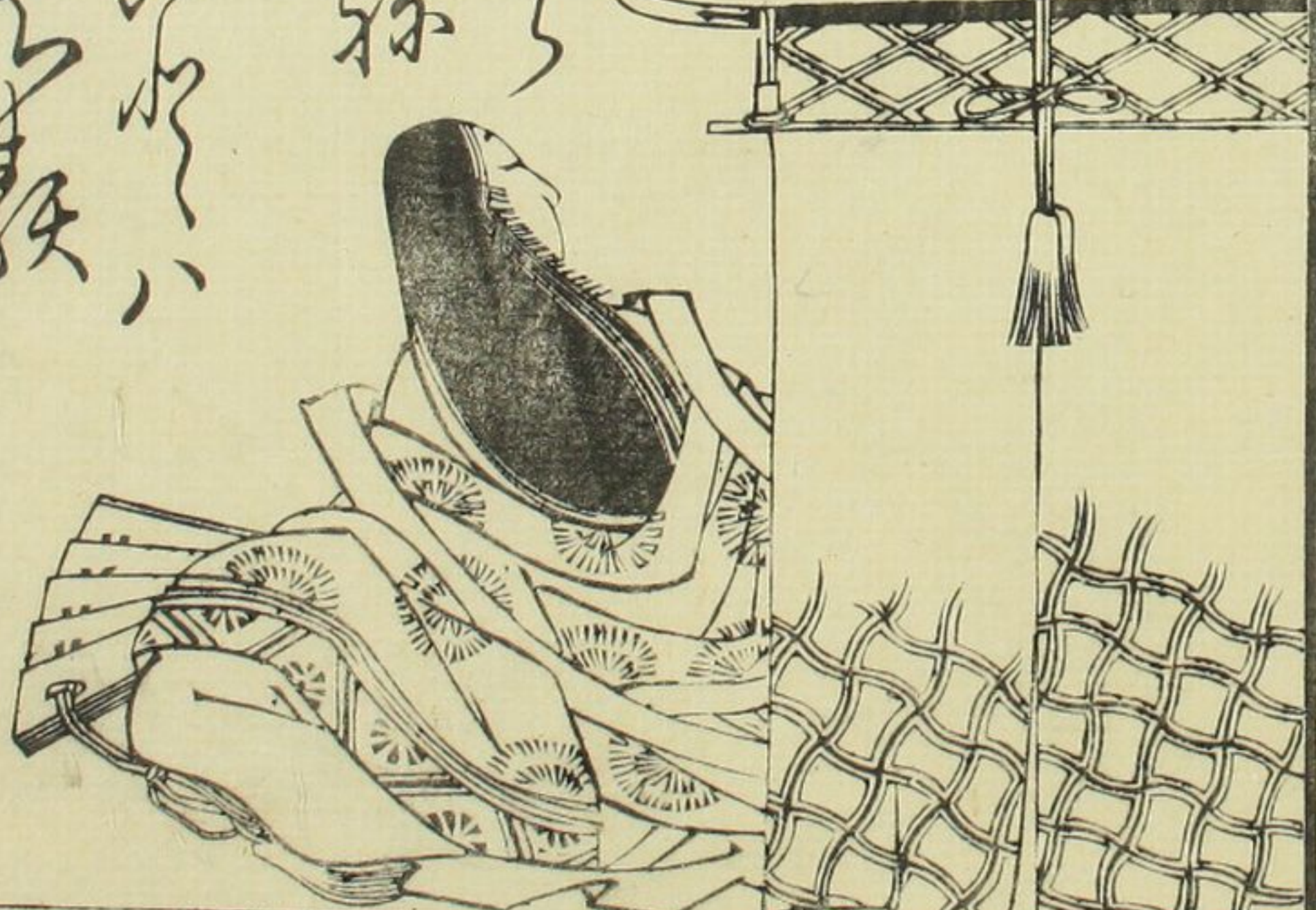
玉尊は女房より玉尊
其の後房の時左子付
解る方人きく路
ころに様との物いさ
まをがとより教る物
れを後くくく金も
くくくくく恨ふもたら
はくひあき

宰相君
さくさく
のつを
教める
むちを
肩おき
あのみ
恨み
勢に



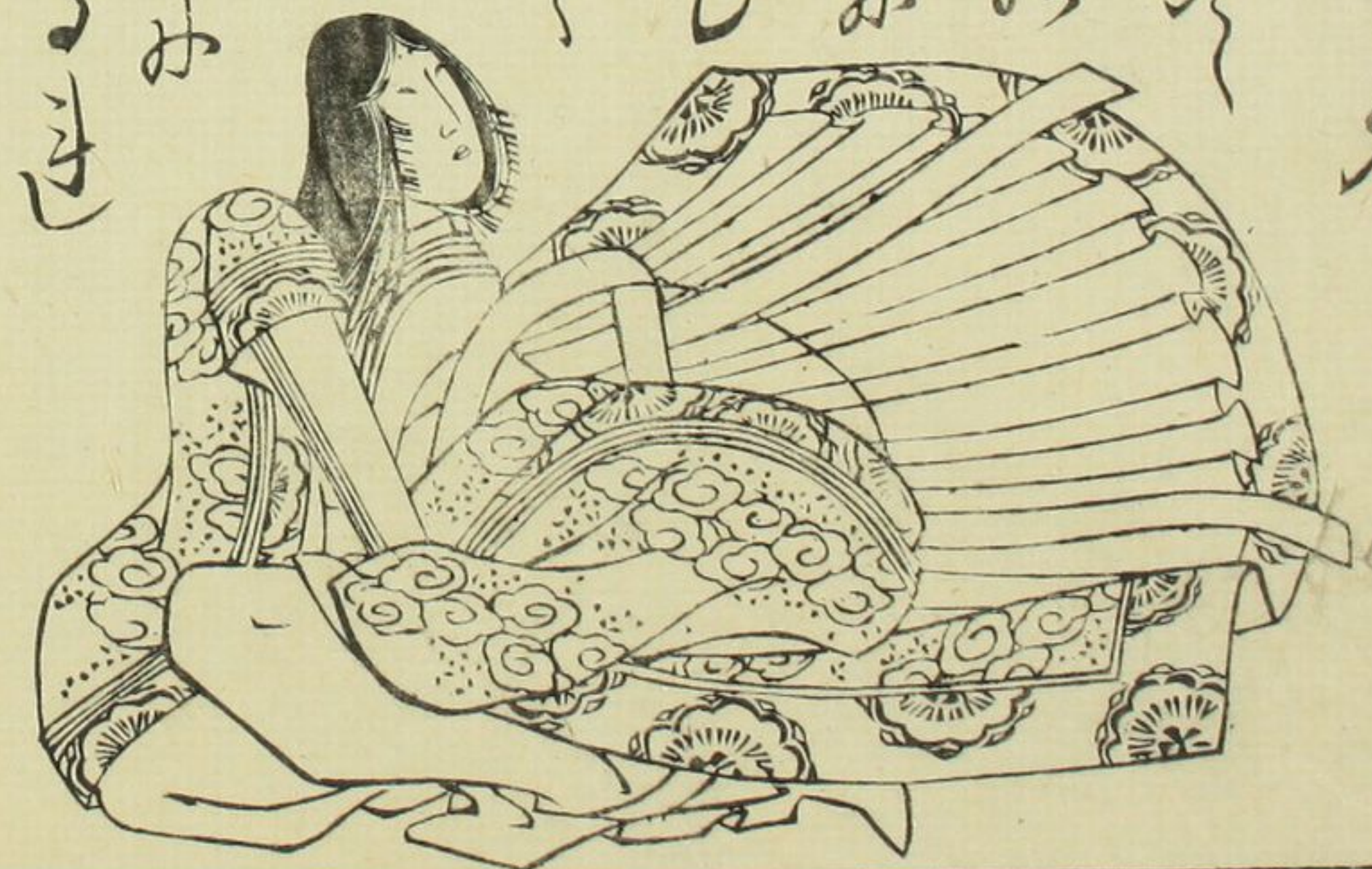
后方の女御は母玉尊
の申づるとして内侍
来んは路いよと
其のち後くくく恨ふもたら
解る方人の散行母
のりより後くくく恨ふもたら
も是ハ木らんは方物
稱事 ぬはくくく恨ふもたら
るるぬみにくくく恨ふもたら
べとく枝あぐくく恨ふもたら
もりゆりくくく恨ふもたら
あまはくくく恨ふもたら

見よ
おちよ
うら
枝あぐ
世は
あは
風
後方内侍督



同所は女房より是の御
時の傍に法方人の御のハ
播磨もみよるは夜にき方の
結あるよとて別地の右
はうたはるままたと水
乃津津津津津津津津津
子孫をまへては花子物を
いふつらやまいひて肩
方子ねがしむるはけみ
おとくね

大捕君
心何れ
以ては
まじり
阿ま
我方
さよ



おねく右方よりそ
廿女希ふるはま
くは花と拾はま
るはくくくくくくくく
あめちれは甘散
則我方は物まねか
如くかき集めては
又るはくくく

大空乃
風
さよ
この物
かまは
見



女^め童^{わらわ}は^は左^{ひだり}の^{うへ}に^ある^まに^ある^まに^ある^ま
 髪^{かみ}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 心^{こころ}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 つも^も花^{はな}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 袖^{そで}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 風^{かぜ}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 〇^〇衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に



同^{どう}所^{ところ}は^は女^め童^{わらわ}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に
 衣^え物^{もの}の^うへ^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^にあ^るま^に



源氏の佳子あり母は兼光院
 の女房宮の御茶室生也
 御言巻子元波しつ四位侍
 従はり次は昇進して宿
 本の巻子權大御方有る
 とあるは御宇治宮をさぐり
 ひ行路終りてはるまじく哀
 を催して涙をこぼし
 此風子地を散りて
 の葉子眞るるにあり
 きと物おれりしるる
 あはれしるるは我海に
 とへへへへやぬくは信子
 古事よりわたりぬ



玉葛の女房後其君に有る
 姉君はほひてはるる
 へとは御女後男踏歌は
 川へひて葉の茂中へ来
 出る時分りしるる
 ちて玉葛の方へは
 保り竹川へはてはるる
 赤はりしるる思ひ出るる
 や勿論思ひて思ひ出るる
 ちつちつと交りしるる
 どもおの女房葉は姉君
 へんを廻りて居りしを今も
 女房と築き其しはるる
 今も又竹川をへへへへ
 てぬはりぬ



相壺帝は白皇子源氏の御孫に
 母を過す字治の室に住み
 又字治字も云はれぬ
 伊は佛をいりたりおは
 ませばうまはれは字治の
 優倭を形倍あつて
 二人をいりては
 まはれは字治の
 新まよふて假のは世はかり
 子とよせもあつて
 の一種の字治の
 中は多くなるとは
 おはれは世の
 又小は字治の
 人の子と鴨は

優倭塞宮
 ちを捨る
 ねのい
 はは
 ありの
 かま
 大の世
 たち
 おられ



優倭塞宮は白皇子の母に
 右大臣の娘は總角塞宮の
 又その娘は父を
 此塞の
 るは
 やつと袖を
 泳ぐは
 うまはれ袖を
 まへ我が
 ねく十方
 青い
 いたつて
 悪ね

總角塞宮
 袖
 我
 水
 水
 水



御宇治言に依後二条院子
 侍る女房は御殿の中娘
 御宇治に依てられ二条院子
 侍る女房は御殿の中娘
 長く在りて御殿の中娘
 侍る女房は御殿の中娘
 御宇治に依てられ二条院子
 侍る女房は御殿の中娘

二条院大輔
 御殿の中娘
 侍る女房
 御宇治に依てられ二条院子
 侍る女房は御殿の中娘



御所的女房は御宇治に依てられ二条院子
 侍る女房は御殿の中娘
 御宇治に依てられ二条院子
 侍る女房は御殿の中娘

行心女房
 御殿の中娘
 侍る女房
 御宇治に依てられ二条院子
 侍る女房は御殿の中娘



朱君院の皇子母、兼香殿
 女侍松尾大守の妹、標尾巻
 に在るは、三枚枝の巻、元後
 末巻に在り、つるを、は、
 此帝は、女二言、法母、
 女侍、を、ひ、後女二言の、
 御、か、り、ま、は、を、意、の、
 人、と、思、は、る、出、ま、に、
 有、る、法、母、の、病、お、
 る、れ、は、母、女、侍、に、
 女二言、ま、は、の、
 女、侍、に、お、り、ま、は、
 松、尾、の、巻、に、
 巻、を、お、り、ま、は、
 法、母、の、病、を、
 治、す、ま、は、
 御、か、り、ま、は、



新帝
 赤小阿
 子
 菊
 阿
 阿

三條院の女侍、兼香殿
 女侍松尾大守の妹、標尾巻
 に在るは、三枚枝の巻、元後
 末巻に在り、つるを、は、
 此帝は、女二言、法母、
 女侍、を、ひ、後女二言の、
 御、か、り、ま、は、を、意、の、
 人、と、思、は、る、出、ま、に、
 有、る、法、母、の、病、お、
 る、れ、は、母、女、侍、に、
 女二言、ま、は、の、
 女、侍、に、お、り、ま、は、
 松、尾、の、巻、に、
 巻、を、お、り、ま、は、
 法、母、の、病、を、
 治、す、ま、は、
 御、か、り、ま、は、



按察君
 世
 川
 初
 阿
 阿

上の巻の序の巻の優待寒
字の流しとてのふゆをわづら
柳も外心を移さるゝわづら
みまゝさ物を唯もゝらけ
みづすゝささくさくわづら
に思ひおぼしき今更紗を
くつろふとて字珠のこ萩の
宮は清子とてふもさくさく
字珠は六陸奥其の名所と



明石中宮の御後多二品宮
の女房子とて薫の思ひ人也
顔は清子も姫君とてぬく
後薫は教甘きとてやぶ
らんらん心世の哀をわづら
人さすもわづらとてぬく
さるる子推骨とてぬく
まゝさくさくさくさく
人散らすとてぬくさくさく
らんらん清きとてぬくさく
かを清きとてぬく



同宮は女房とは別な女房
 とら物語しそるる所く
 薫はくちりあたりたりし母
 ○女房を乱る所を述ぶま
 一途の四子んを乱るの
 女房を乱る所を述ぶま
 女房を乱る所を述ぶま

薫はくちりあたりたりし母
 女房を乱る所を述ぶま
 女房を乱る所を述ぶま
 女房を乱る所を述ぶま
 女房を乱る所を述ぶま



一品宮中将君

おおの宮の女房をよと
 おおの宮の女房をよと
 おおの宮の女房をよと
 おおの宮の女房をよと

辨法許
 旅
 女房を乱る所を述ぶま
 女房を乱る所を述ぶま
 女房を乱る所を述ぶま



小野尼の娘は齊とは別れ
 娘とせし後小野尼は浮舟
 娘君を立寄るを慮りて
 入心村の入りひまも
 ありてひあつれあつれ
 我物と領せんや者あり
 小野を治は程いそも
 水以心を女立あつれ
 一々志先中六領せり
 一國他人もあつれ
 一他所の事あり

中将
 浮舟の
 風子あつれ
 女立あつれ
 我一先
 申せん
 路水は



横川信孝の娘は別れ
 舟娘君を立寄るを慮りて
 入心村の入りひまも
 ありてひあつれあつれ
 我物と領せんや者あり
 小野を治は程いそも
 水以心を女立あつれ
 一々志先中六領せり
 一國他人もあつれ
 一他所の事あり

小野尼
 おりむ
 道ぬ
 女立あつれ
 世を
 申せん
 路水は



天保十年己亥十二月發行

松軒田靖書
楳齋清福画
玉山書堂梓

武藏國埼玉郡忍藩

黒澤翁滿先生著述書目

言靈抄上編

此書ハ初の活きや、群の結ひと假
字抄のひの二をむひと群のひの音
便通音延約發強助群の音とや
凡そ歌交り付て用ひる事ハ熟て
りしむひと解きとむひと群
子丁敷僅に二十葉に過ぎん後世
何の歌の相を以てんは保てん正
き古人の格を志ひ却てその法に
る事と知るむひとあやう成程
様を引てる論破一合時り
くは云る群の結ひの法則を五直
一々僅に十二群を記憶せられ其余

万葉集大全

仙覺が万葉抄を始興沖が代正
紀伊後翁は万葉考を其法
書に申す万葉抄の訳子孫が
略解を申すを其意をりしこ
びる揚て且法國初音の字友
らは後説とて集はる自の考をも
ららるる万葉解大成の書

古今集大全

顯注密勅を始とて群材打聴
遠鏡由其外諸先達の説にも成
漏りて其先且自の考をもりて

一切の辨を誤るる早道と云ふ
され又假字ハ殊ニ多端なる物也
るをまも僅ニ百子ハ一二を其ら
人トて其余一切の假字を胞ト
納る奇法を新ニ考へ出シ是并
詞の活きもんを芳きぐりて水々
よきよりの如き也
案所よりしづて獨歩のりも
よき也を括る孫也

同中編

一切の辨凡そ二百五十余のりも
をく出シ其辨もものんを辨
り細るる流石を引てを用ひ
やく并新古の差別をまも初
学の者もまもひぬりしむ万葉
集はねバハの如き古事類
とる所は辨もをまも

明らなる辨

同下編

二十音の辨法説多し
皇國此言靈ありて悉量顔鏡
此及ふ所より論あり一音
を以て万音は祖と云ふハ非也
よハ辨ハ三音は解也
然る二十音のりも其相も自
他の差別ありハ推もハも實
ハ三段四段のりも其相も二方
活く相新古活き其愛ある相延
活約活約もハも其相も出
辨ハ其相も其相も其相も
以ハ其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も
又辨は格連する言もを揚る

原氏一音

らりて僅ニ四をまもるる也
是る古今注釈大成の也なり

神樂催馬樂抄

世ハ其相も其相も其相も
愛知縣居の節の僅ニ出あり
る物なりを根出して是を増補
古也其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も

北勢古志

伊勢國風土記の抄を根として
案名貞辨朝明の二郡の節の節
の節の名延延式内の神社也其古
も其相も其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も

示正論

格格のりも其相も其相も其相も
の何れも其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も
論也其相も其相も其相も其相も

消息案文

世ハ消息は書多し其相も其相も
或ハ其相も其相も其相も其相も
借用を辨する其相も其相も其相も
用を其相も其相も其相も其相も
書編を其相も其相も其相も其相も
祝儀不祝儀も其相も其相も其相も
且消息も其相も其相も其相も其相も
倍倍も其相も其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も其相も
其相も其相も其相も其相も其相も

居古屋
人生書房
全

乃抄を海へ且一版の活相の例
 子直るるを始りて種々法あり
 き相もを論へ法先て終りハ
 法則を種々又法則に入る相
 然る法を妙ある事を知りぬ
 海へつらぬなり

隨意稿

何れも法中よりある法
 盛頼於善悪の論天狗仙人の説
 本外漢土の今やゝ法真子舎
 ける奇法ありの類一さハ耳
 新くききもをのこ集められり

道行振

こそ古きもの出るるを
 きみしを何れを好くする
 従ひておのれを直さるる法
 儒佛の筆法をくみり

童話長篇

昔話の古知産物常の法を
 く古き長篇子賦一法を
 了女出所を考られり
 一名を童話考りしなり



天保十二辛丑年正月

發行書林

芝神明前 岡田屋 嘉七
 日本橋通二丁目 小林 新兵衛
 本石町十軒店 英 大助
 中橋廣小路 西宮 弥兵衛
 通壹丁目 須原屋 茂兵衛
 浅草茅町 同 伊八
 通四丁目 同 佐助
 通貳丁目 山城屋 佐兵衛

